

TOTO 通信

2021年 夏号
Toward a Creative
Architectural
Scene

Return
of
the Private
Room



特集 個室の 復権

Proposal

01



Tsuneyama Mio

Nousaku Fuminori

常山未央+能作文徳

Proposal

02



Natalia Sanz Laviña

Yamamura Takeshi

YSLA Architects

Proposal

03



Hori Eisuke



Nagai Takuo



Sano Satoshi



Inagaki Junya

Eureka

Proposal

04



Masuda Shingo

Otsubo Katsuhisa

増田信吾+大坪克亘

Proposal

05



Akiyoshi Koki



Nagaoka Ben

秋吉浩気+長岡勉 VUILD

特集に関連して
ミゼットハウスの動画を
ご覧いただけます。



宮原真美子+中島弘陽

24

旅のバスルーム114

文・スケッチ/浦 一也 グリムス・ポツダム・プラッツ(ベルリン)

40

大室佑介

28

現代住宅併走50

文/藤森照信「旧井上房一郎邸」原設計/アントニン・レーモンド

42

金野千恵

32

最新水まわり物語56

Hisao & Hiroko Taki Plaza

48

山本理奈

36

TOTOギャラリー・間で展覧会をします

アンサンブル・スタジオ展

52

News File

TOTO News, Cera Trading News, Books

54

表紙/常山未央さんと能作文徳さんによる「身の丈の部屋」。
編集制作/伏見編集室 デザイン/岡本一宣デザイン事務所 印刷/ゼネラルアサヒ

室の復権

Proposal

06



Miyahara Mamiko

Nakajima Hiroaki

宮原真美子+中島弘陽

Work Well Home
with COVID-19

Proposal

07



Omuro Yusuke

大室佑介

Proposal

08



Konno Chie

金野千恵 teco

人がひとりで過ごすための場を考えたい。

建築家は、人同士のコミュニケーションが

豊かになるための空間に

さまざまなアイデアを提案してきているが、

一方で、人はひとりで過ごす時間も長い。

何かに集中するとき、没頭したいことがあるとき、

あるいは瞑想するときもあるかもしれない。

そして、このコロナ禍においては、

リモートワークが進み、ソーシャルディスタンスも促されている。

否応なく人と交わらない生活の渦中に立たされ、

この災禍において「個室」の意義を

再検討したいと考えさせられた。

人間がひとりになる場所としての「個室」をどうとらえるのか。

上記の想いを投げかけ、

複数の建築家たちに「個室」を計画していただいた。

特集 個室

Special Feature

Return
of
the Private
Room

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 528
Summer 2021

提案01	身の丈の部屋	常山未央+能作文徳	4
提案02	LDK+200C	YSLA Architects	8
提案03	あざみ野の土	Eureka	12
提案04	緑地と家	増田信吾+大坪克亘	16
提案05	Nesting	秋吉浩気+長岡勉	20

提案06	あなたとの距離、わたしの個室
提案07	個室でみる夢
提案08	上原のすまい
コラム	個室をめぐる生活者の想像力/創造力

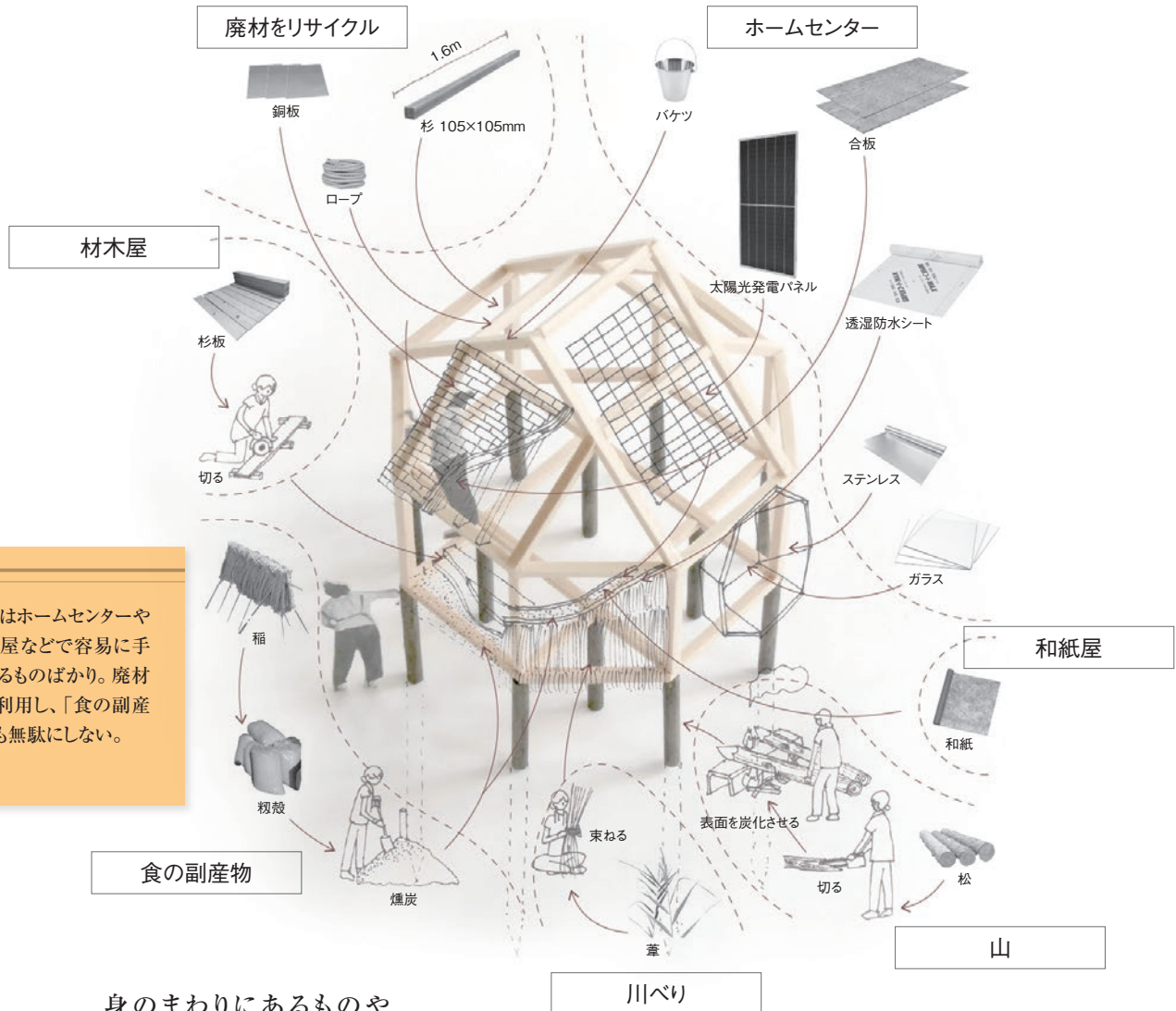
『TOTO通信』は
インターネットでも
ご覧いただけます。

→ <https://jp.toto.com/tototsushin>



作品名 身の丈の部屋

建築家 常山未央+能作文徳



材料はホームセンターや材木屋などで容易に手に入るものばかり。廃材も再利用し、「食の副産物」も無駄にしない。

身のまわりにあるものや
手軽に手に入れられるもの、
廃材を利用して
自分でつくってみよう。

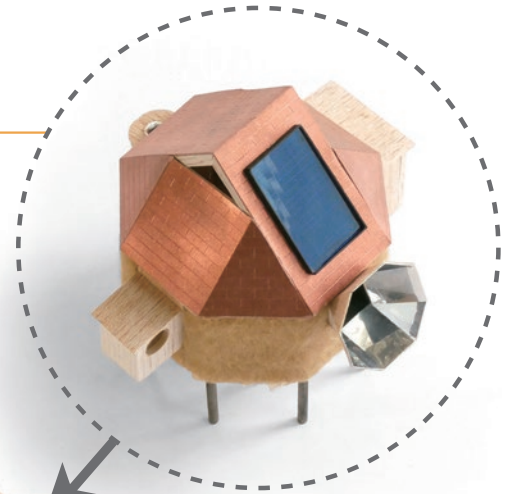
身の丈の部屋をつくってみよう。現代の人々の暮らしはエネルギーもマテリアルも使いすぎている。材料は身のまわりにあるものや、手軽に手に入るもの、解体現場で捨てられたものを利用する。近くの農家で出てくる籾殻や藁をもらってくる。ひとりでも持ち運びが容易で、特別な道具や技術がなくても加工できる工法でつくられるようにする。時間はかかるけれども、一日の過ごし方を想像しながらどんな設えがよいか思案するのは楽しい。身の丈サイズで、自分でつくって、エコロジカルフットプリントの小さい建築だ。

土壌に負担をかけないようにコンクリート基礎ではなく、焼いた松杭の上に木造の架構をのせる。表面積が小さく気積が大きい球体から発想した八角形の入母屋の形の架構である。仕事をするにはパソコンやスマホが必要だ。最低限のエネルギーを自給できるように太陽光発電パネルを南側の屋根面にのせる。ノートパソコンを広げて外を眺めて仕事ができる。曇りや雨の

小さなたたずまいの
大きな部屋

現代版の「晴耕雨読」

個室という言葉は、物理的・精神的に「閉じる」ニュアンスを帯びている。常山さん、能作さんは、私たちが天候に大きく影響を受け、自然サイクルの一部として生かされている事実を受けとめたうえで、「身の丈」の(=自ら閉じて責任を負える)暮らしを再解釈した。



太陽光発電パネルをのせた屋根の下には、糶殻で断熱された八角形の部屋が。



仕事や食事から、お茶や休憩に仮眠まで。さまざまな活動ができるよう、ミニマムながら十分に家具が設えられている。

日は小さなバッテリーがあれば事足りる。雨が続いて電力がなくなったら仕事はおしまい。太陽に合わせて暮らせばいい。太陽には反射板で太陽光を集めて熱を発生させるソーラークッカーがある。お日さまの力で沸かしたコーヒーでの一服は格別だ。パソコン作業に疲れたら横になって頭を休めよう。寝転ぶと丸窓からは外の景色が見える。北側のコンポストトイレには天窓があり、口から入った食べ物がお尻の穴から糞便となって出て土に戻っていく。用を足すときに空と身体と地球が一体に感じられるのだ。リモート会議の合間に梯子で庭に降りてみる。屋根から集められた雨水を畑の野菜にあげて気分転換。隣のおばさんが育ち具合を尋ねてくる。トイレの肥やしのはたらきがすこぶるよい。寒いのは嫌いなので部屋はきちんと断熱したい。毎日食べる米の副産物である糶殻を燻して断熱材に使えば、無料でゴミも減らせて一石二鳥だ。自分でつくったから修理や更新もなんてことはない。

この部屋は身の丈サイズだが、太陽や地球を感じられる、大きな部屋なのだ。

BB' 断面図

0 0.5 1m

1/50

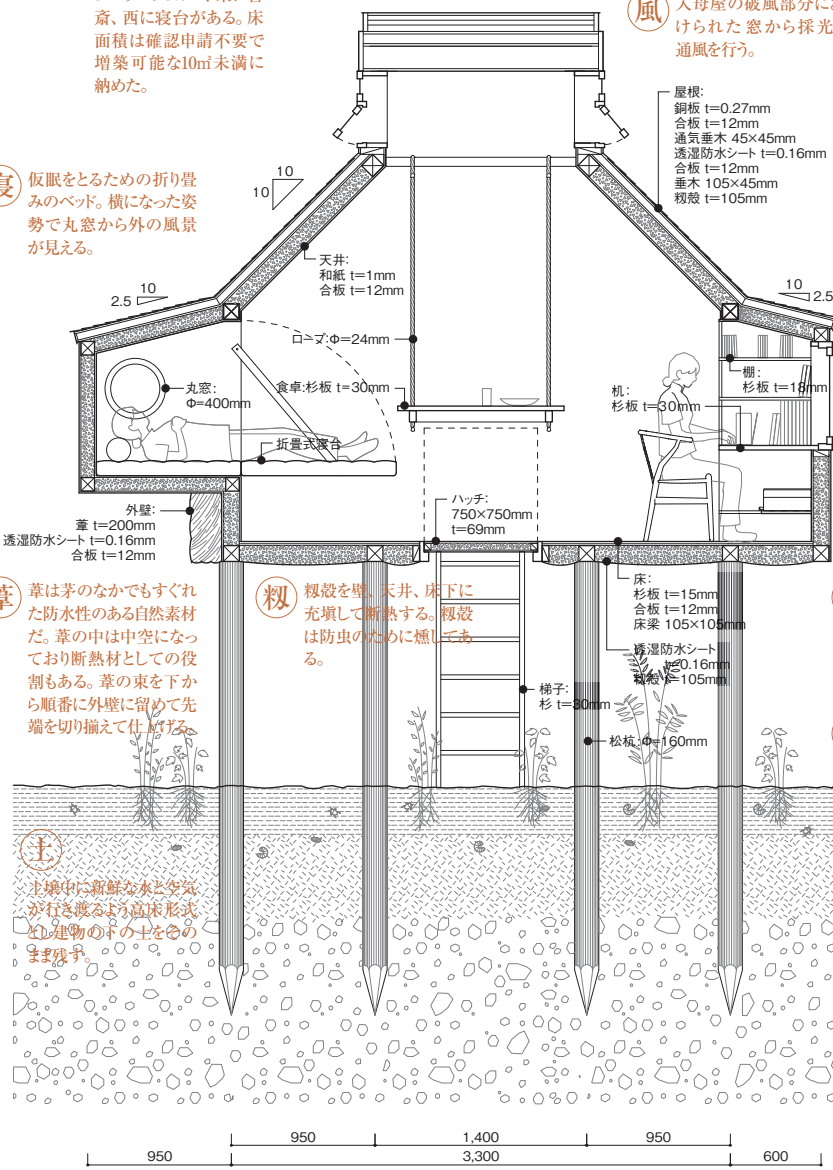
八 表面積が小さく気積の大きい球体から形を発想し、DIYでの施工を簡易にするために八角形に分割した。中心には丸テーブル、北にコンポストトイレ、南にソーラークッカー、東に書斎、西に寝台がある。床面積は確認申請不要で増築可能な10㎡未満に納めた。

寝 仮眠をとるための折り畳みのベッド。横になった姿勢で丸窓から外の風景が見える。

風 入母屋の破風部分にあげられた窓から採光・通風を行う。

働 窓台と一体の作業机。仕事をしながら外を眺められる。両脇には本棚、足元にはプリンターがある。太陽光で発電した電力でノートパソコンなどの機械を動かす。

卓 部屋の中央には直径1,100mmの食卓がある。下部のハッチから出入りしやすいようにするため、脚をなくしてロープで吊られている。



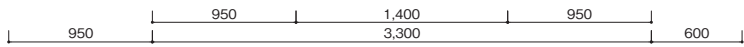
葦 葦は茅のなかでもすぐれた防水性のある自然素材だ。葦の中は中空になっており断熱材としての役割もある。葦の束を下から順番に外壁に留めて先端を切り揃えて仕上げる。

枋 枋を壁、天井、床下に充填して断熱する。枋役は防虫のために焦らさず乾燥させる。

高 床が1.6m程度地面から上がっているため、湿気や雨から木材を守り、容易に白蟻被害を点検できるようにしている。

杭 3mの長さの土用の焼いた松杭を12本打ち込み、コンクリートを使わない簡易な基礎とする。焼いた松杭の表面の多孔質の層には菌糸が絡みつき、土壌と弱い力で一体化する。

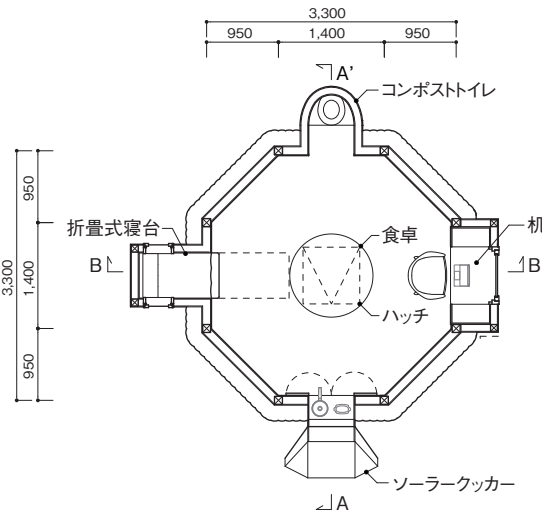
土 土壌中の新鮮な水と空気が行き渡るよう高床形式とし建物の下の土をそのまま残す。



平面図

0 1 2m

1/100

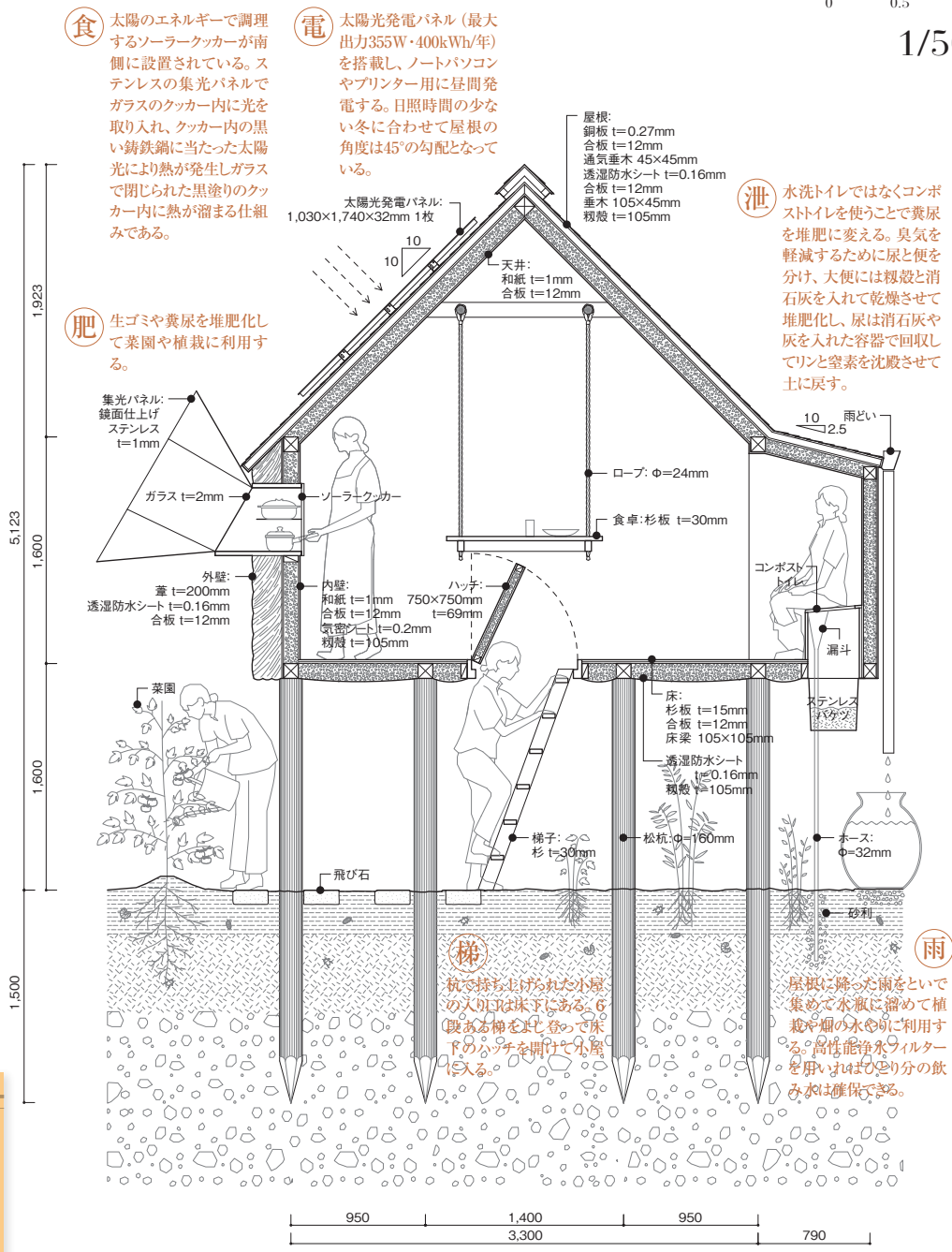


10㎡未満という床面積だが、八角形の形を生かして東西南北に各機能がうまく納められている。

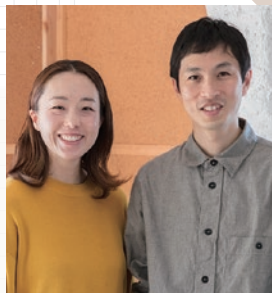
AA'断面図

0 0.5 1m

1/50



風や光、熱といった、一般的に扱う環境要素にとどまることなく、住み手までも含めたエネルギー循環が見えるのがおもしろい。



Tsuneyama Mio Nousaku Fuminori

写真/鈴木淳平

つねやま・みお
1983年神奈川県生まれ。
2005年東京理科大学工学部第二部建築学科卒業。05年プロット・サバタアーキテクトゥ（スイス）。06年スイス政府給費留学生。08年スイス連邦工科大学ローザンヌ校建築学科修士課程修了。08年H H Fアーキテクトゥ（スイス）勤務。12年mnm設立。東京理科大学助教を経て、20・21年同校特別講師。おもな作品「不動前ウス（13）」、「西大井のあな」（工事進行中、能作文徳との共作）。

常山未央

のうさく・ふみのり
1982年富山県生まれ。
2005年東京工業大学工学部建築学科卒業。07年同大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。10年能作文徳建築設計事務所設立。同大学院助教を経て、18年東京電機大学准教授。博士（工学）。おもな作品「高岡のゲストハウス」（16、能作淳平との共作）、「ピアノ室のある長屋」（18）、「西大井のあな」（工事進行中、常山未央との共作）。

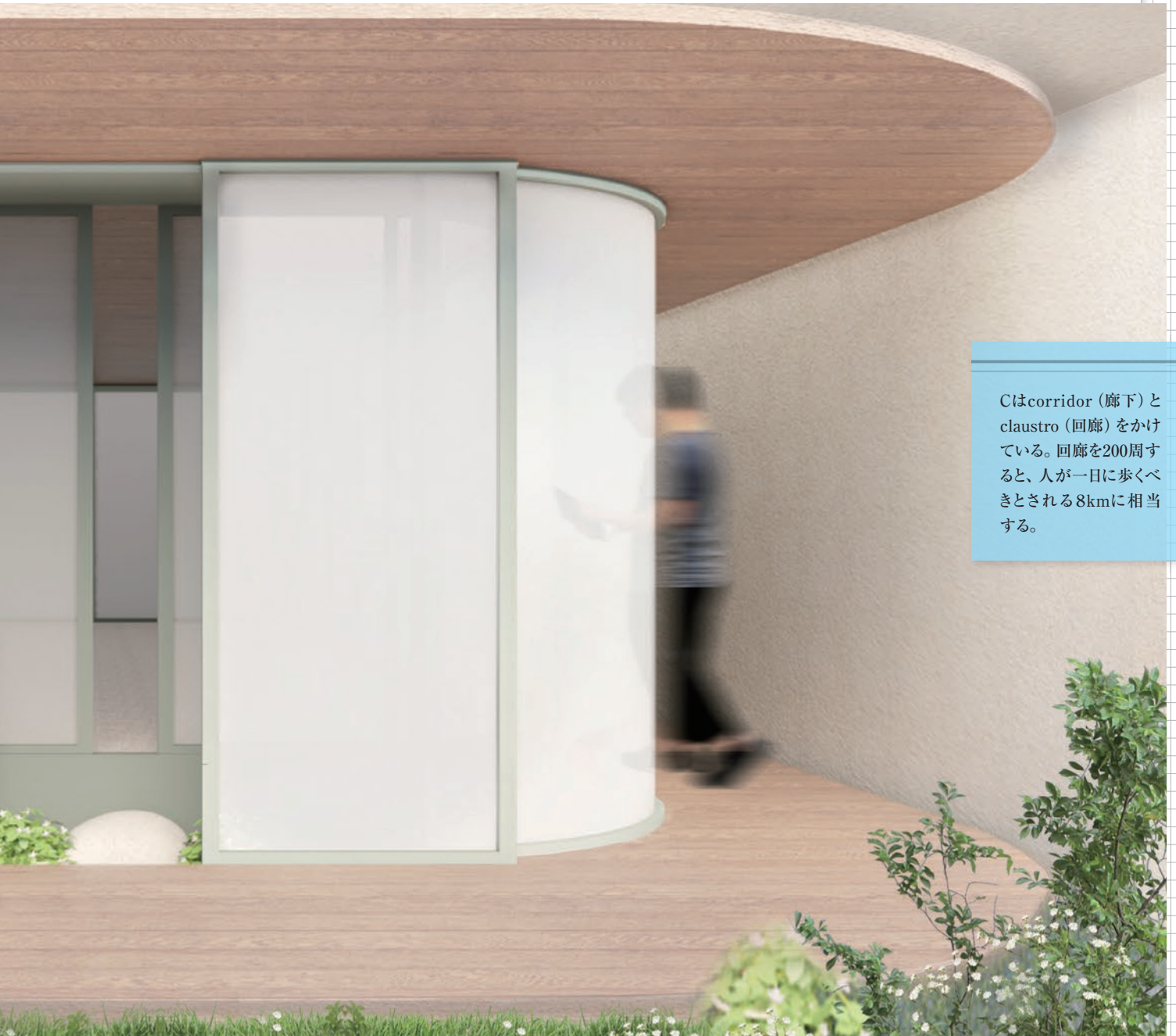
能作文徳

Profile

作品名 LDK+200C

建築家 YSLA Architects

すぐに目を引く
回廊のような空間。
これこそが、今回提案された
閉じない個室。



Cはcorridor（廊下）と
clauastro（回廊）をかけ
ている。回廊を200周す
ると、人が一日に歩くべ
きとされる8kmに相当
する。

回遊によって“個室化”を促す

思考が行き詰まった際の散歩や軽い運動は、
凝り固まった脳と体をほぐし、時に予想外のアイデアをも引き出すことがある。
山村さん、ナタリアさんは、回廊からデザインのヒントを得た。
建築が動きをアフォードして人間に“個室化”を促すという逆説的な発想が興味深い。

LDK+200C



健全な精神は健全な身体に宿る——ユウェナリス (Juvenalis)
(mens sana in corpore sano)

mens sana in corpore sano

2000周は一日に人が必要とする距離である。

COVID-19は日常のあらゆるシーンを変化させた。外を自由に歩くことが制限され、健康は住空間の見直しに必要なキーワードとなった。今回は、健康をテーマに考え、結果としてそれが「個室」の復権に新しい可能性をもつと考えるに至った。また、今後日本の各地で再考が必要となるマンシヨンのリノベーションを前提に計画している。

本計画の特徴は回廊的な空間である。そこが「個室」となる部分である。中世の修道院には、回廊空間が存在した。一般的に回廊はその空間の特徴が目されるが、ここでは「ひとり歩きまわる」ことに着目したい。西洋の修道僧は、個室から回廊へ出て、そこをぐるぐると歩きまわりながら思考を巡らせ、本を読み、自己と対面する個人的な空間として活用していた。日本では縁側の空間が同質の空間だといえる。共通するのはいずれも外部空間である点である。人は机に向かって考えるよりも、

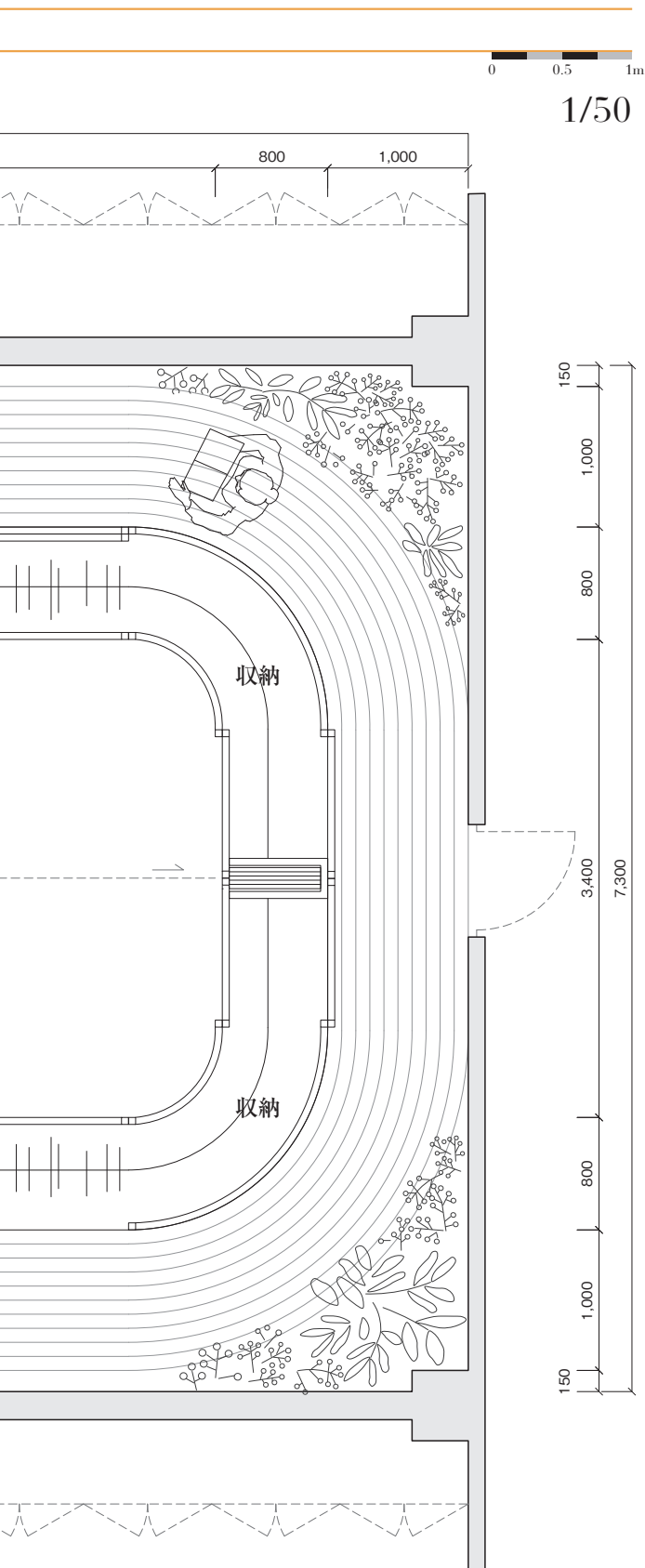
外を歩いているときのほうがよいアイデアが浮かぶ。そんな経験は誰しもあるだろう。よって、「個室」は外部空間であることが重要であると考え、計画の端緒とした。

また、家庭内でのディスプレイも新たな要素である。本計画では回廊の内側とそのさらに内側にもうひとつの個室が備えられている。その中間領域には水まわり、収納、玄関、坪庭などがまとめられている。つまり、内側の個室からも回廊の「個室」からも独立して生活できるようになっている。さらに、中間領域を介して、内側の個室の住人と「個室」の住人は距離を保ちつつ生活を共有することができ

る。本計画には二種類の個室を用意することで、豊かな生活像を描いている。

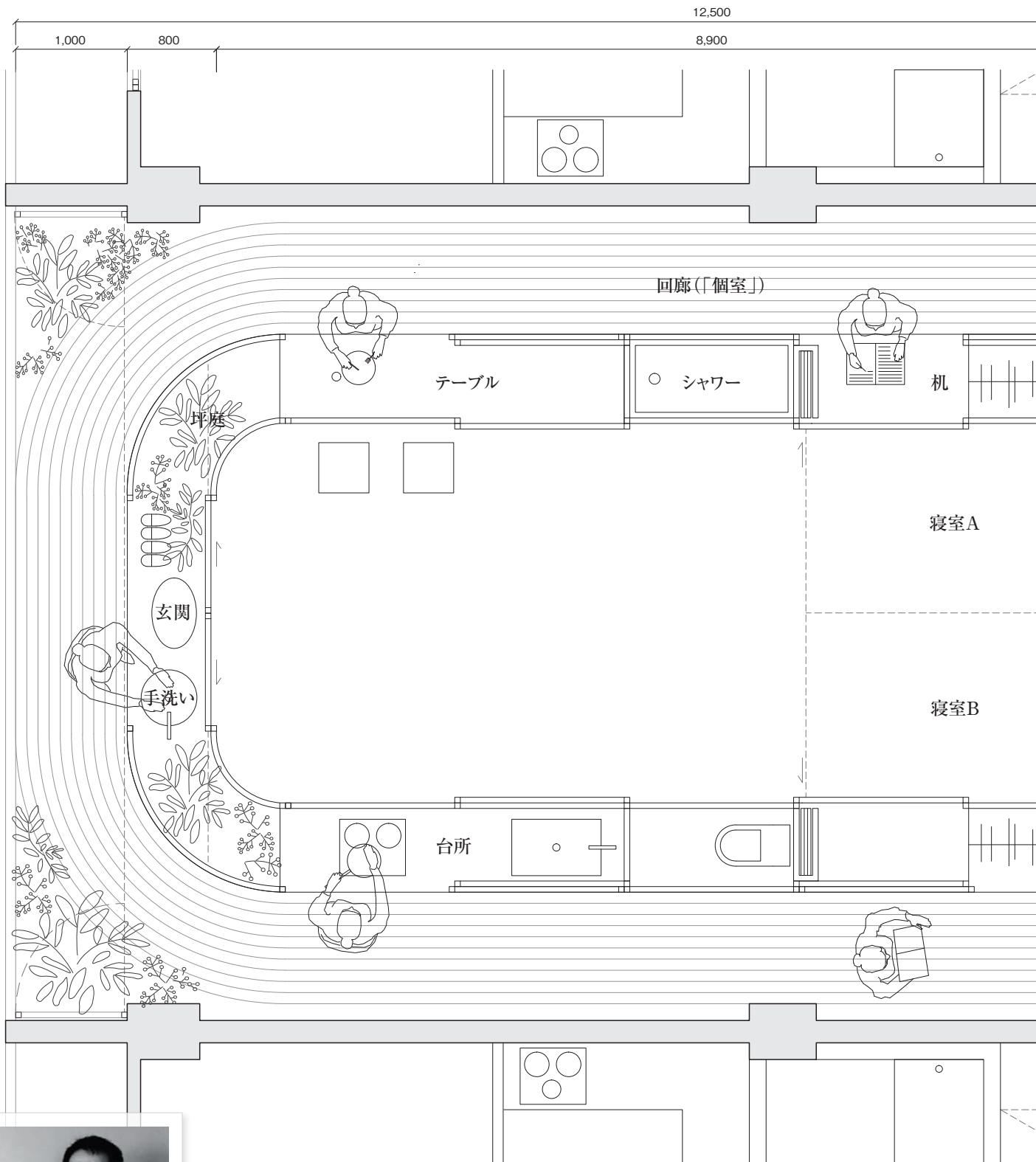
個室ときいて閉じた個室は避けたいと考えた。ぐるぐるとまわるとは、昔から人がひとりになるときに行っていた個室化の自発的な行為であった。健全な精神は運動なくしてありえず、開かれた場所を歩く空間こそ、「個室」が復権するためのカギであると考えて、一日に2000周する「個室」を提案する。

昔から人は
ひとりぐるぐると歩きまわることで
思考を巡らせ
自分と向き合っていた。



回廊と空間の中心部という、性格の異なるふたつの「個室」。それを仕切る／つなぐ中間領域には、水まわりや収納、坪庭などが納められている。

平面図



Natalia Sanz Laviña Yamamura Takeshi

Y S L Aのおもな作品
 『Garden of Eden』(19)
 『Light House』(20)。

1982年スペイン・パレンシア生まれ。2007年パルセロナ建築大学卒業。05〜06年リスボン工科大学留学。07〜16年限研吾建築都市設計事務所勤務。16年Y S L A設立。

ナタリア・サンツ・ラヴィーニャ

1984年山形県生まれ。2006年早稲田大学理工学部建築学科卒業。06年パルセロナ建築大学留学。09年早稲田大学大学院造理工学専攻修士課程修了。12年早稲田大学大学院造理工学専攻博士後期課程修了(入江正之研究室)。12〜15年ドミニック・ペロール・アルシテクチュール勤務。16年Y S L A設立。

山村健

Profile

作品名 あざみ野の土

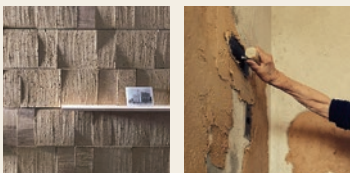
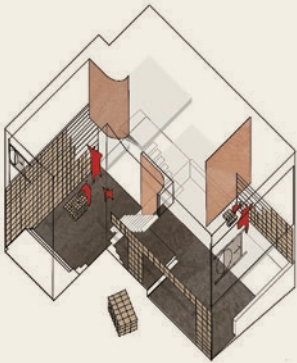
建築家 Eureka

個室を求めている
多世代住宅に
私的な場所を
自然に内在させるには。

approach 3

内在

Internalize



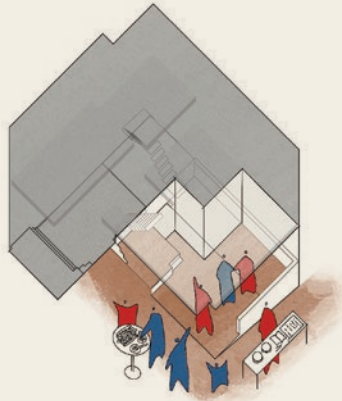
同居する家族それぞれが「家」を内在化するマテリアル

建設やメンテナンスのプロセスへ、老若男女が参加可能な土材料・構法を導入する。土の触感(手触り)と、土仕上げの経年変化が、家族の暮らしを包み、個人の記憶に深く定着される。※山田宮土理氏、中村航氏(建築材料・構法)と共働。

approach 4

公共

Deprivatize



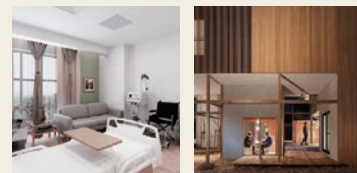
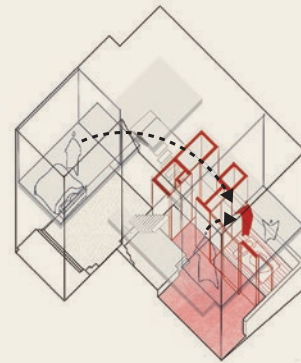
住宅の公共性、非住宅化

住宅に穴をあけるように、地上階を客間と庭とともに、前面道路、住宅地に開く。血縁家族の居住専用住居に外部、他者を招き入れ、地域と住居を混交する。開くことが家族の中とは異なる、個人の多様な暮らしを実現する。

approach 5

適応

Revolutionize



ライフステージに応じ、住み継げるプランニング

老いを受けとめるように、接地階のみでの暮らしへシフトできる平面計画(二箇所の水まわり)とする。「終のすみか」として、客間・仏間が住宅における最後の「個室」となる。

更新時期にある 多世代住宅の未来を 再編する

神奈川県・あざみ野の台地に、両親のもと、子どもたち家族がともに暮らす多世代住宅における「個室」の計画。家族各人の個室を確保することのない「集まること」ともに暮らすこと」にプライオリティのある住宅での「個室」とは何か？

住宅は、昭和40年代半ばにひな壇造成されたエリアに計画する。50年を経た今は更新時期にあり、同時に周囲の住宅開発も広がる。ひな壇造成された急斜面地は、ともすると敷地内にも上り下りの激しいバリアフリーな住環境となってしまう。このランドスケープを再編するように、道路とフラットで、地域に開放的なグラウンドレベルを計画し、斜面地形を室内外に取り込みな

多世代住宅における「個室」とは

カフェやSNSの普及のおかげで「個」になることが容易な現代においては、住宅とはむしろ家族が集まるためにこそ必要な装置かもしれない。そこに個室を設ける意味とは何か、どんな設計が必要なのか。Eurekaは、論理的に答えを導く。

approach 0

調整

Adjust



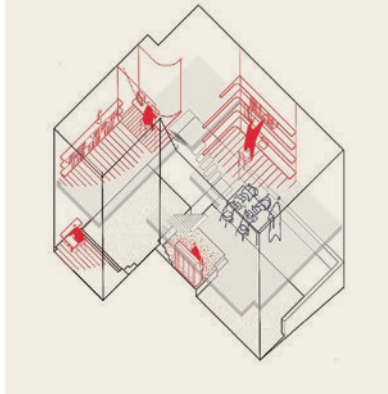
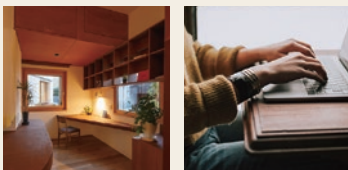

伸縮する
ワンルーム・ホーム

民家のように、大家族が暮らすひとつながりのワンルームとする。状況に応じ建具を開閉し、寝間・私室を構成することができ、療養の空間としても想定する。

approach 1

私化

Personalize

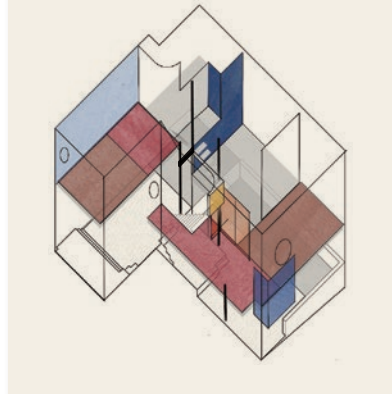
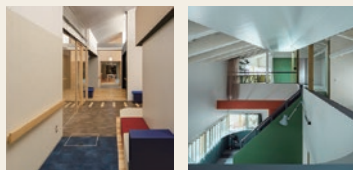
居間に組み込まれた
パーソナル・ブース

在宅ワークのできるブースを、居間の周囲に設える。個人のための小さな機能空間を団らんの場に共存させる。

approach 2

分節

Segmentalize

不揃いな
ワンルーム

家族の空間へ、個人の居場所・時間を選びとり、確保するための設え。テクスチャー・色彩を切り替え、ワンルームの中に「個室」を意識させる。

がら、床がスキップし、上下階をつなぐ断面計画とする。

この拡大家族は、健康な両親が60代後半を迎え、30代の子どもたちはそれぞれの家庭・家をもちながら、実家とを往復する関係を築いている。子ども家族はあざみ野に近居したり、孫とともに同居する。みなが集まる正月は15人が集う。住宅は、大きな家族が集散し、時とともに形を変えながら多世代居住していく場となる。

家族が全員揃う食卓や、住宅全体が居間となるような空間など、「ハレの日」の前提条件に対して、六つのアプローチの重ね合わせを試みる。限りなく「個室」のない住宅に、いかに多元的に個人の帰属する空間や、暮らし・行為・意識・記憶を内在させるかの試みである。

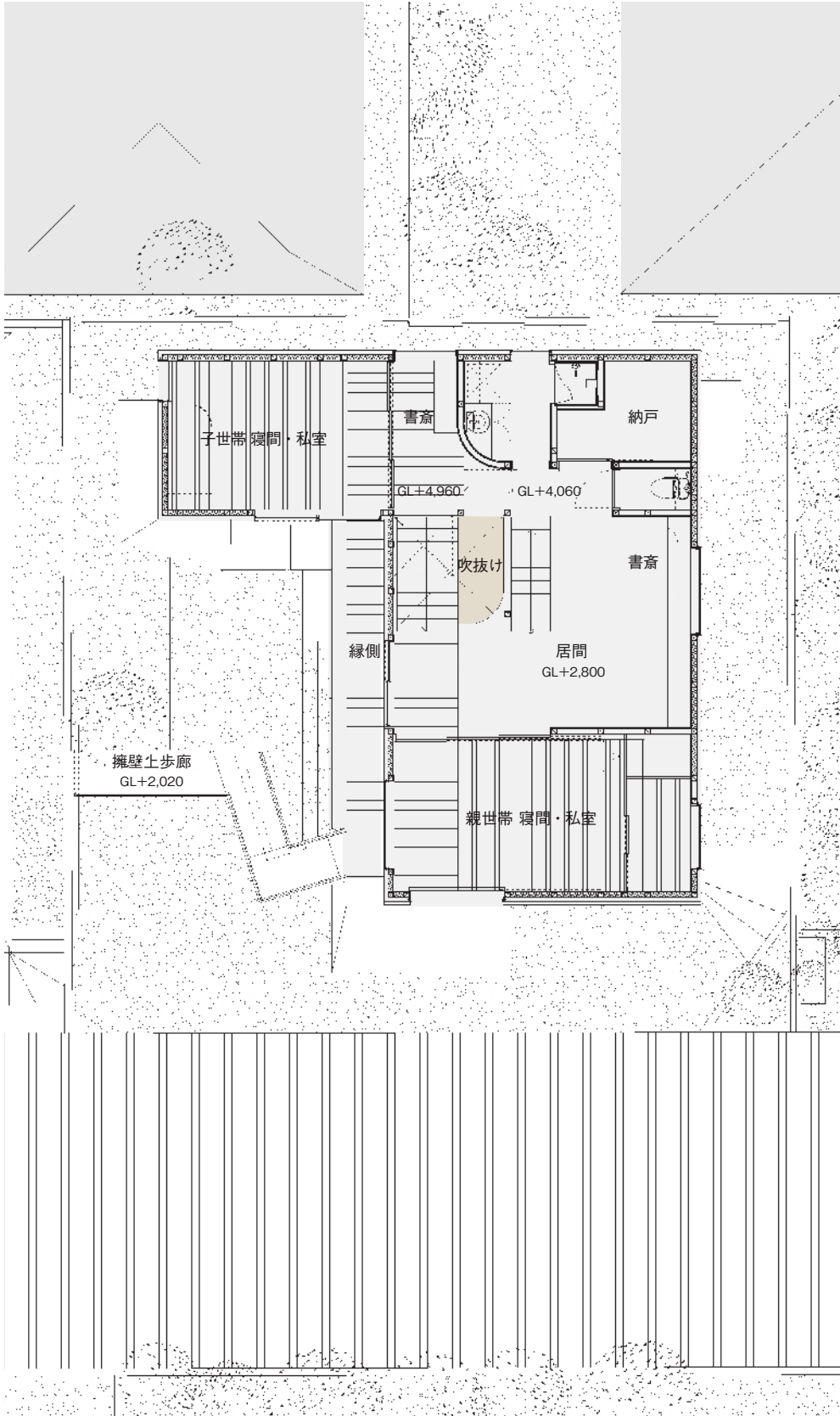
2階平面図

0 1 2m

0 1 2m

1/125

1/125



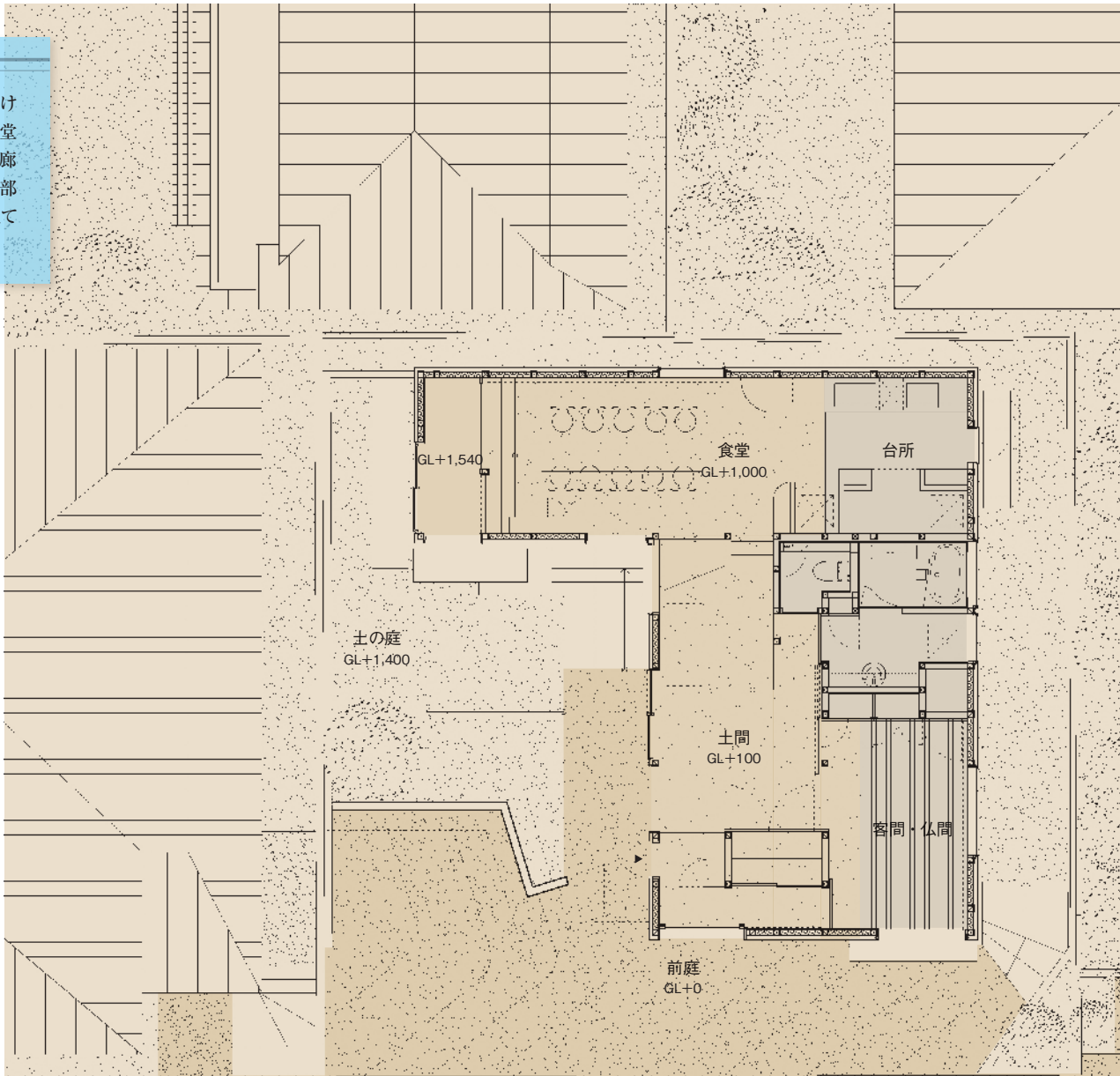
Proposal 03 Eureka

広い平面を
建具や段差で区切り
それぞれが
個の場所になりえる空間に。

1階平面図



土間や庭を近隣に開けるとともに、土間→食堂→土の庭→擁壁上歩廊→居間→書斎と、外部を介した回遊性も備えている。



Hori Eisuke



Nagai Takuo



Sano Satoshi



Inagaki Junya

稲垣淳哉(いながき・じゅんや)、佐野哲史(さの・さとし)、永井拓生(ながい・たくお)、堀英祐(ほり・えいすけ)の4名が主宰する建築設計事務所。いずれも1980年生まれ、早稲田大学出身。稲垣・佐野が建築計画・意匠、永井が構造計画、堀が環境設備計画を担当。おもな作品「感泣亭」(2012)「Dragon Court Village」(13)「Nagasaki Job Port」(18)「奈義町多世代交流広場ナギテラス」(19)。

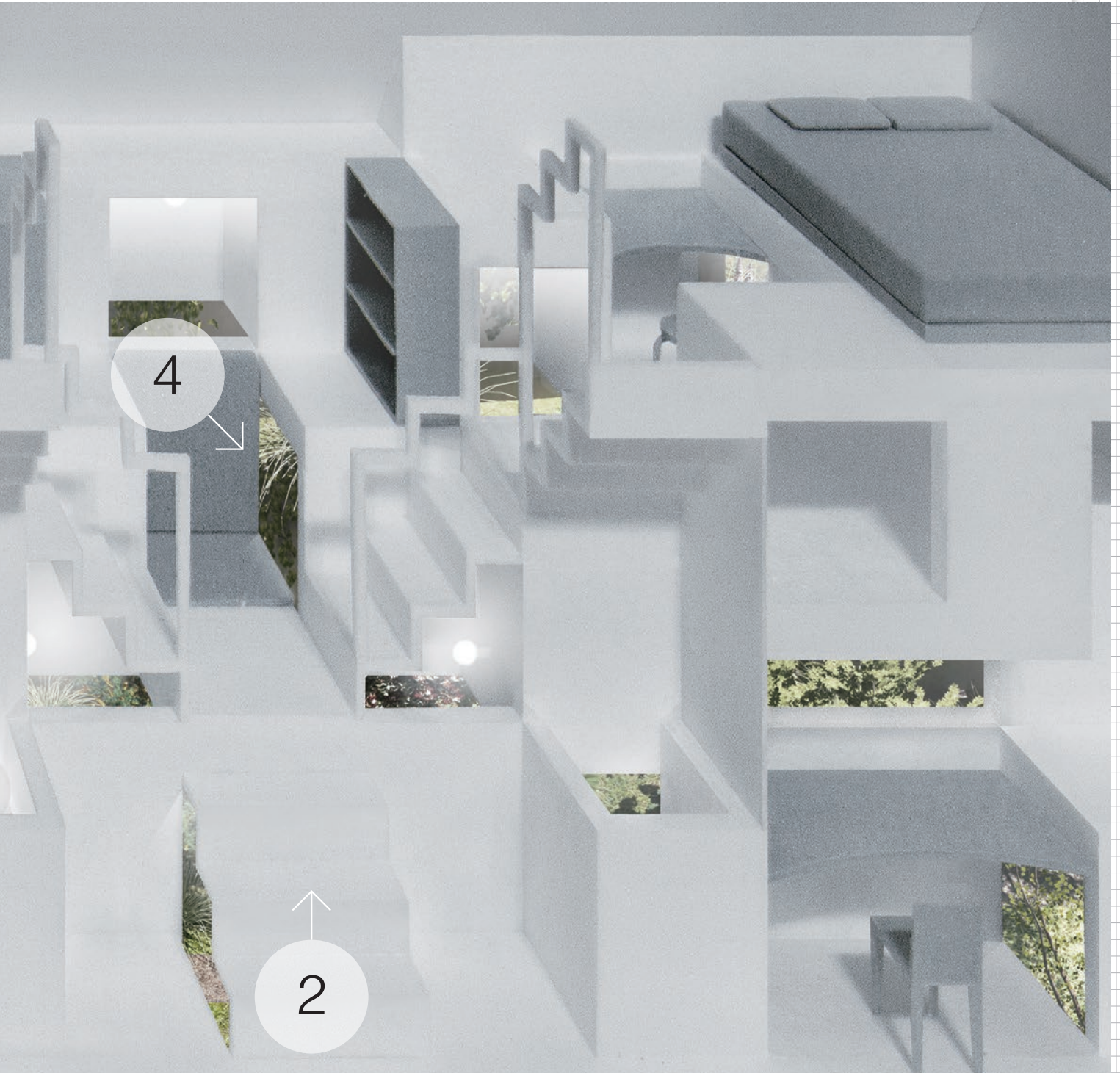
Profile

Eureka

作品名 緑地と家

建築家 増田信吾+大坪克亘

「初めての個室は二段ベッド」。増田さん、大坪さんは、狭さを解決する家具システムの発想を建築にまで高めた。空間を余すところなく使いたい=個室化したいという原理的な欲望のもと、機能に合った空間のボリュームを実直に見直し、刈り取った空間を「居場所」として遍在させる。



狭い世界を
切り分けていくのではなく
たくさんの場所として
つなぎとめたい。

気積を見直すことから始める

個室の余剰

子どもの頃、僕の部屋は独占ではなく、8畳くらいの部屋を妹と使っていた。その部屋の端っこには大きな窓があり、そこに沿うように二段ベッドが置かれていて、上の段が僕の寢床だ。ベッド以外の床にはいつもおもちゃをいっぱい広げ、のびのびと遊んでいた。いわゆる個室はなく、寢床が個室の機能を果たしていた。

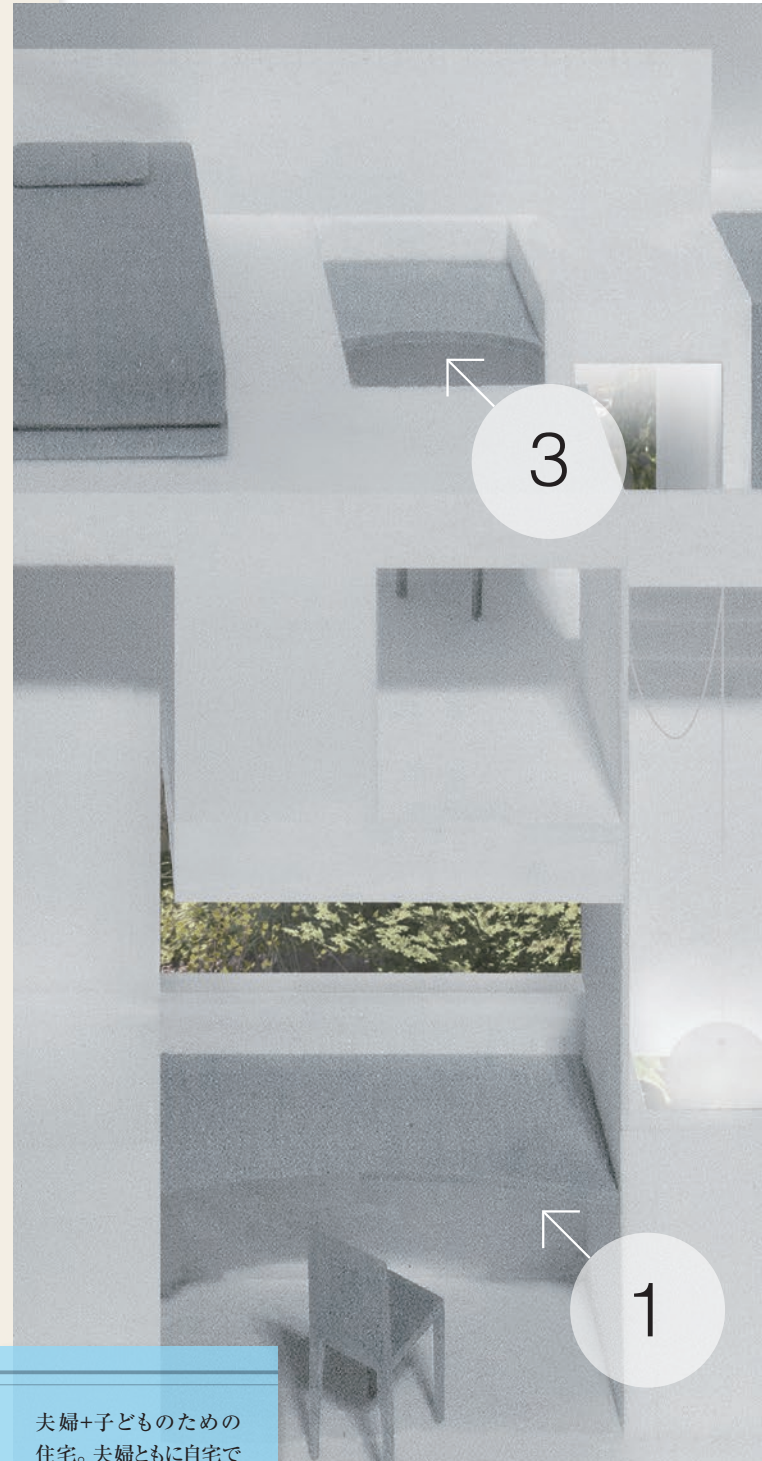
それから中学生くらいになると、真ん中に壁を立てて部屋をふたつに分け、僕と妹は小さな空間をそれぞれあてがわれ、完

全な個室をもった。でもひとり3畳半くらいになってしまっているからとても狭いわけで、机があり、寝るときに布団を敷けばもう床は埋まる。床に敷くようになった布団に寝転ぶたびに天井を見つめ、二段ベッドのときは立体的に体感していた天井付近が空虚で、無駄に感じていた。

もともと妹と使っていた部屋はふたつで使っている時点で個室ではなく、その後に区切られた部屋のほうが一般的な個室なわけだが、それでも機能が立体的に展開していた前者のほうが、自由に使える場は広く、夢中に

なれば自分だけの時間だつて過ごせるし、その都度、感覚的にひとりになれる場所にもなった。そういうこともあつてか、僕は思春期に「システムベッド」にやたらと憧れた。机、椅子、収納の上にベッドがあり、簡易階段やハシゴがついていた。狭い空間を有効に使うという合理性の完成形だと思った。

今設計している住宅は、そんな記憶とつながっているかもしれない。リビングやダイニングなどの人が集まる場所、トイレやお風呂は、ある程度部屋として気積を確保しないと合理的に組み立てられない。なので、そ



夫婦+子どものための住宅。夫婦ともに自宅でも仕事ができる環境が必要だったため、窓や家具を構造と一緒に考え、居場所の連続体になることを目指した。

① …………… 番号は次ページのアングルの番号と対応。

れらは部屋として1階と2階に振り分けて配置し、寢室は、いわゆる物理的な個室から「使えていない」個室の「余剰」空間を刈り取り、機能を適切なボリユームで集約してみている。階段、壁、窓、照明も一緒に編み込みながら、要素を圧縮することで、小さな敷地と暮らしの関係がもっと身体的になつて皮膚感覚へも接近しないだろうか。敷地や建物や個室でこの狭い世界を切り刻んで分けていくことよりも、それらの機能がたくさんの居場所になつてつなぎとめられていく住まいを目指したい。

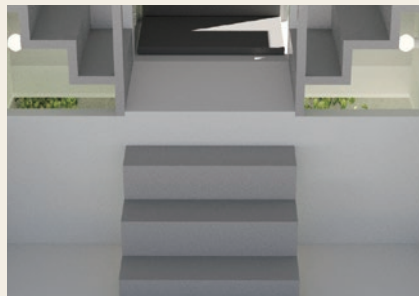
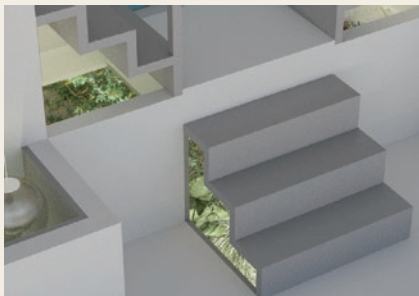
(増田信吾)

空間の中に
ゆるやかに点在する
いろいろな個室の形。



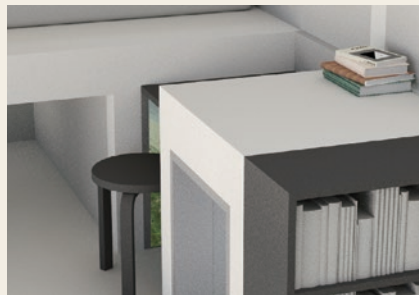
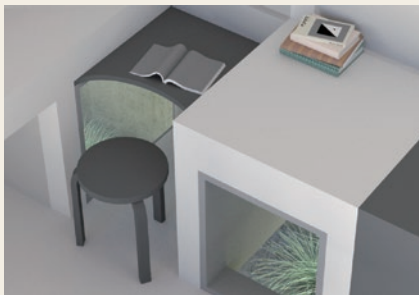
← ①

1階のLDK沿いにある机。緑地に生息する植物に囲まれる。隣のペンダント照明は室内と屋外を同時に照らす。



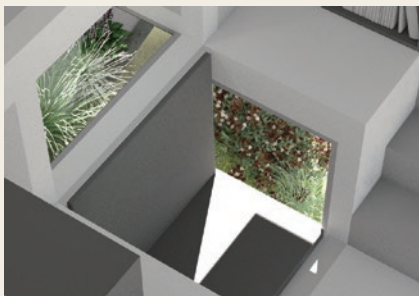
← ②

緑地の上へ張り出す段数の少ない階段。階段裏の窓から緑地が垣間見え、ひとつの居場所になる。



← ③

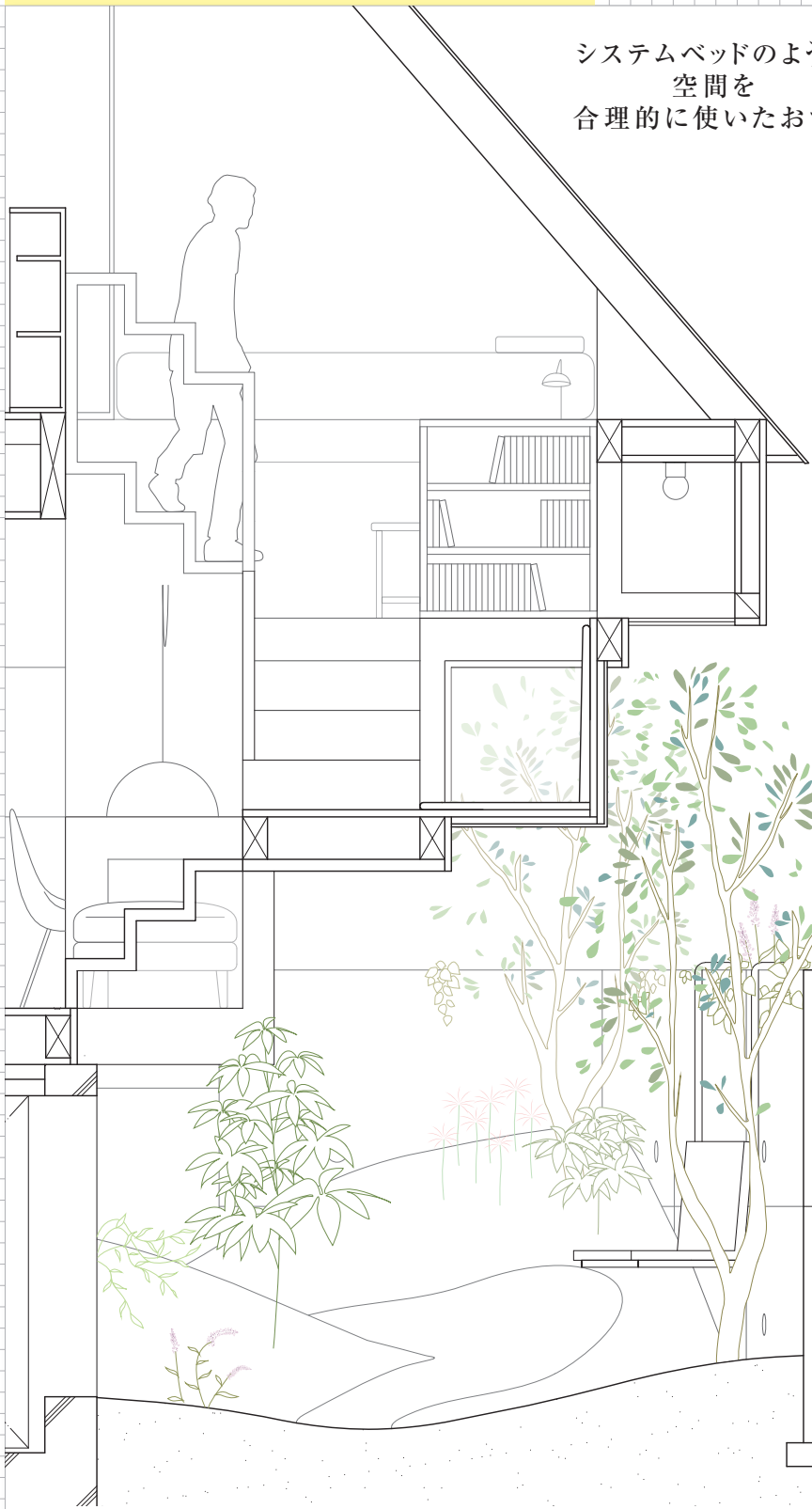
2階へ向かう途中にある机。建物が緑地側へ張り出した天辺。緑地の上空を浮遊する居場所になっている。



← ④

階段の踊り場に本棚がある。窓が編み込まれることでニッチが生まれ、そこに座れるようになっている。

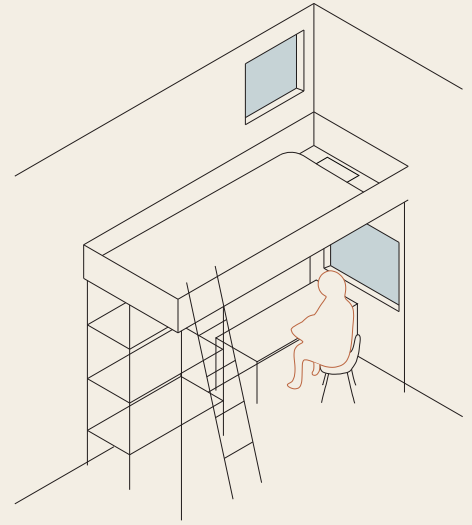
システムベッドのように
空間を
合理的に使いたおす。



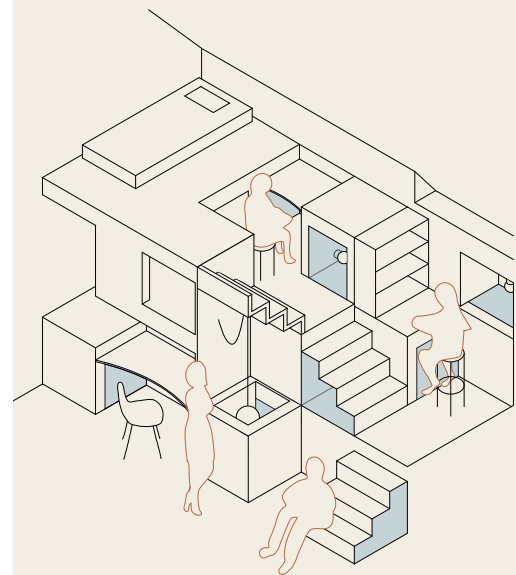
1/30

0 25 50cm

システムベッド



家具・窓・照明・階段を
いっぺんに考える



適切な床面積や天井高を再考し、ボリュームを細かく振り直した。コンパクトになった居場所は、親近感を感じさせる。



Masuda Shingo Otsubo Katsuhisa

写真/Nagai Anna

増田信吾+大坪克巨としてのおもな作品「**「躯体の窓」**(14)、「**「リビングプール」**(14)、「**「街の家」**(18)など。

増田信吾+大坪克巨としてのおもな作品「**「躯体の窓」**(14)、「**「リビングプール」**(14)、「**「街の家」**(18)など。

増田信吾

ますだ・しんご
1982年東京都生まれ。
2007年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業後、増田信吾+大坪克巨を共同主宰。19年より明治大学特任准教授。

大坪克巨

Profile

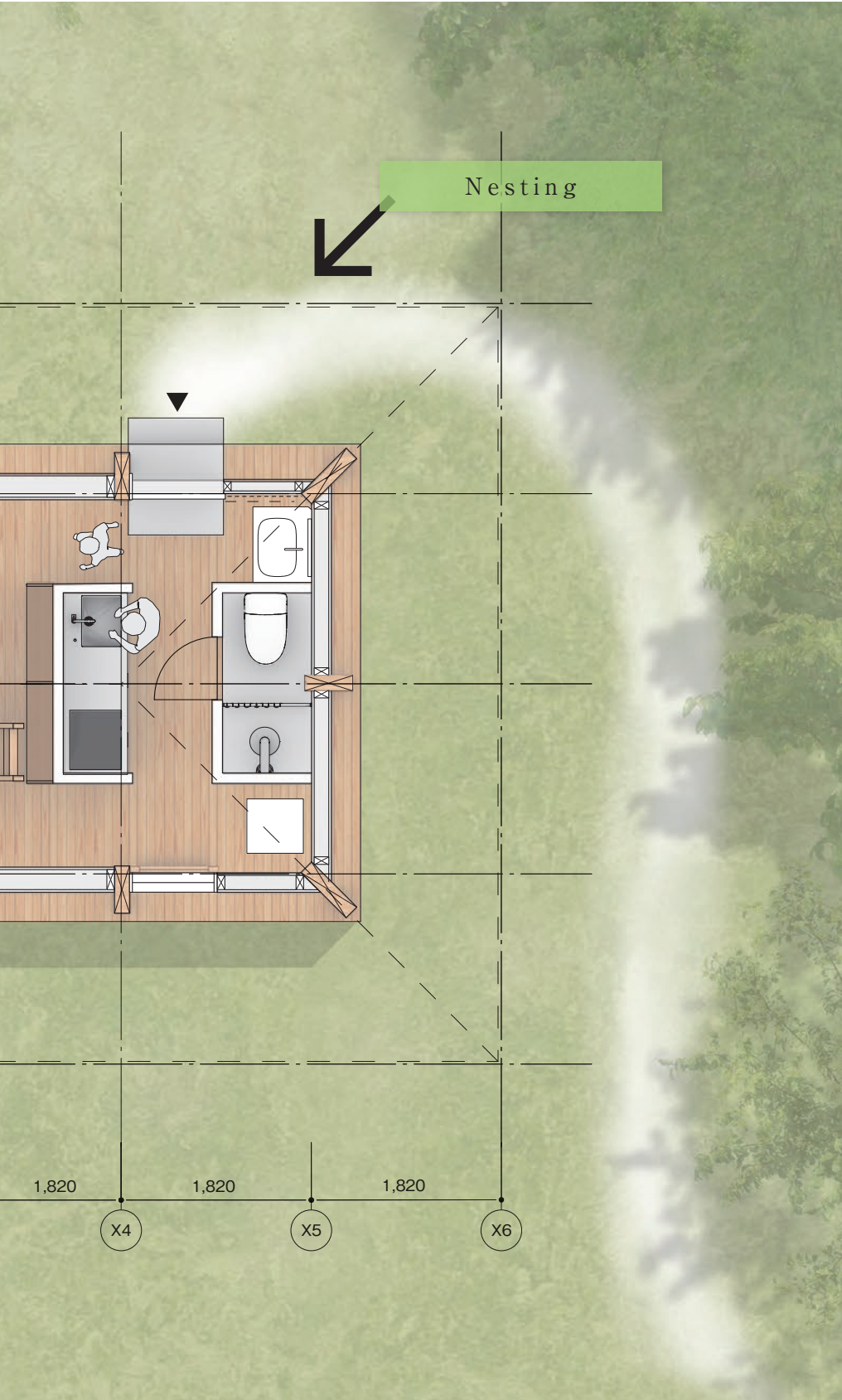
おおつぼ・かつひさ

1983年埼玉県生まれ。
2007年東京藝術大学美術学部建築科卒業後、増田信吾+大坪克巨を共同主宰。

作品名 Nesting

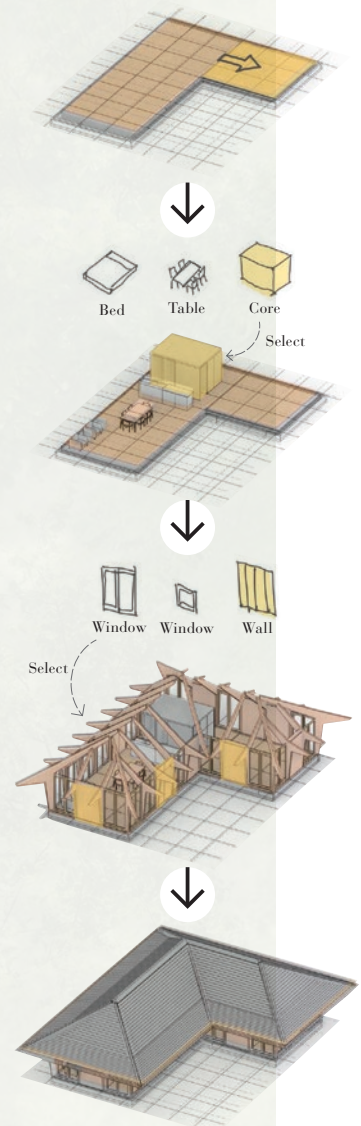
建築家 秋吉浩気+長岡勉 VUILD

これからの住まい方とは
自分たちなりの価値観で
場所やアクティビティを
選び創造すること。



専用アプリで あらゆる人を 設計者に

床面積を決め、設備を
セレクトしながら間取りを
描いていくと、瞬時に家
の形が立ち上がり、見
積もりまでも提示してく
れる。開口部の位置や
建具の性能も選べるの
で、環境に合った家づく
りが可能。



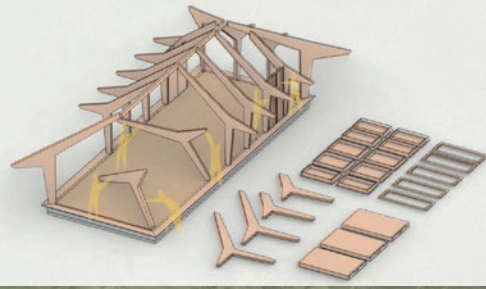
「自分でつくれる」理想のアトリエ

秋吉さん率いるVUILDは、デジタル・ファブリケーションを駆使して、産業となり手を出せなくなった建築という行為を本来あるべき住み手のもとに取り戻すための提案を続けている。

一人ひとりが実現可能な工法というリアルと、こんな場所にこんな小屋がほしいという理想とが、絶妙なバランスで着地した。

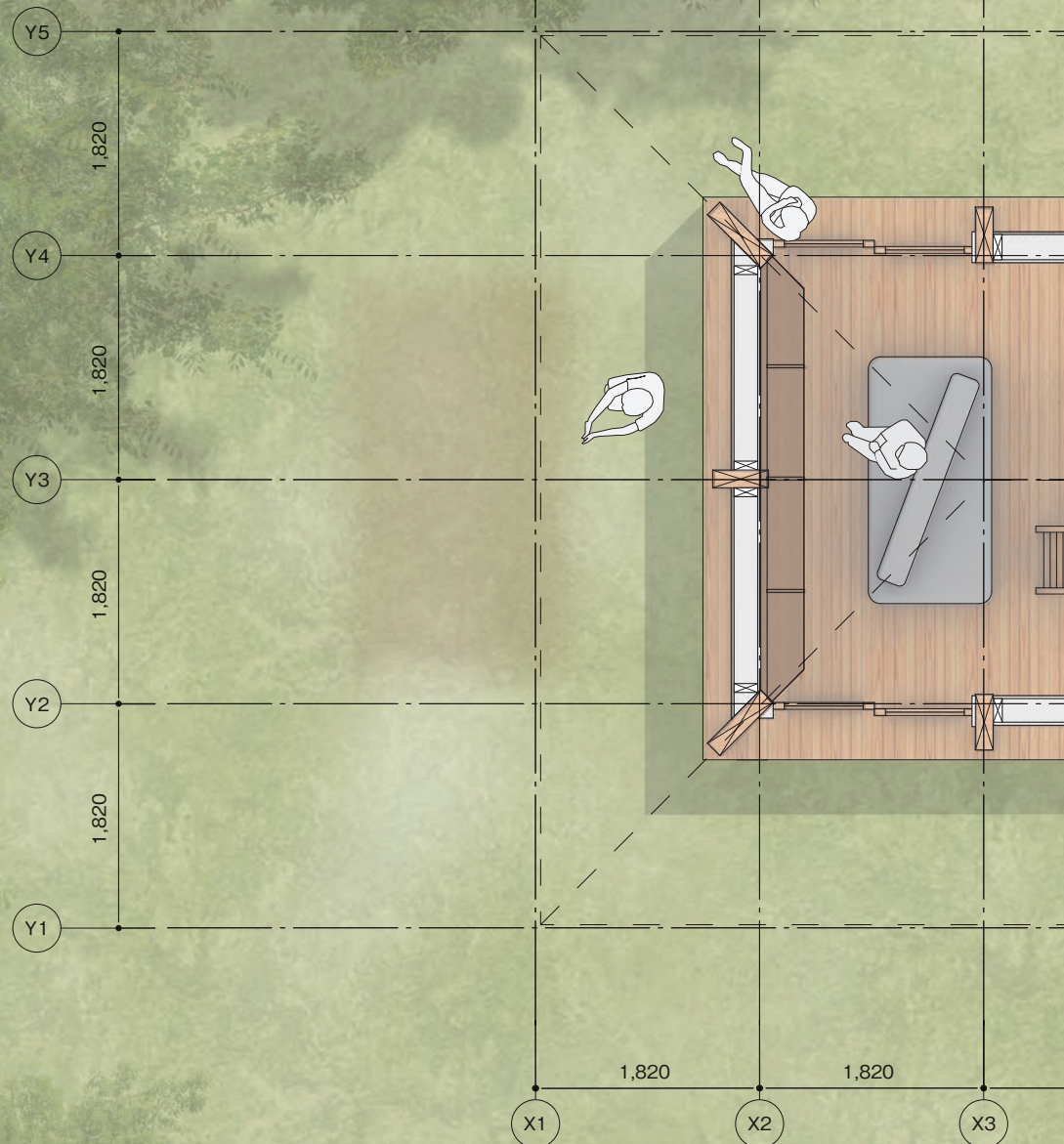
プラモデル 感覚で 家を組み立てる

材料には地域の木材を使用。部品はモジュール化され3D加工機から出力される。一間ごとに配された頬杖型の構造体は簡単に上棟ができるので、家族や仲間とプラモデル感覚で家づくりを体験できる。



どんな要件も 妥協しない 本当の建築を

都会ではもつことが難しかったスタジオやアトリエを低コストで。快適だけど環境への負荷は最小限に。資本主義が犠牲にしてきたものを決してあきらめない方法を追求する家づくり。



1階平面図

1/60

理想の個室づくりを支援する

2019年に竣工した「まればとの家」では、地域の森林資源を用いてデジタル加工機で建築部品を出力し、住民参加で建設を行うことで地域完結型の家づくりを実施することができた。この経験を踏まえて、現在VUILDでは住宅領域の新規事業の開発を行っている。

想定している顧客体験としては、坪単価一万円以下の絶景の敷地のなかからお気に入りの場所を選び、独自に開発した住宅

設計アプリを用いて施主自身の手で設計を行い、間取り・内装・仕上げ・外装などの詳細まで決定する。その後、敷地付近のデジタル加工機から出力された部品を受け取り、施主自身の手で建設を行うというものである。

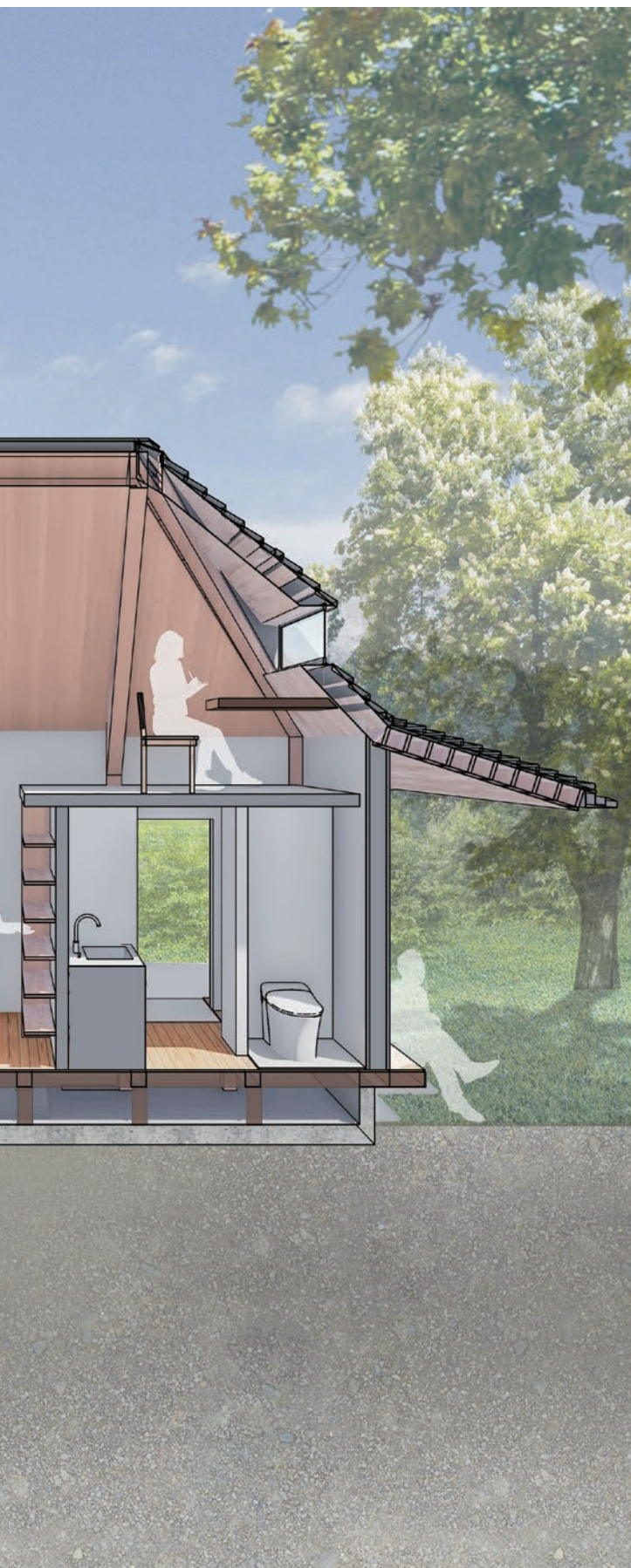
現在開発中の工法では、増改築への対応や、雁行配置にも対応できるシステムとしており、利用者は間口が2間か3間のもので選ぶことができる。1間ごとに傾杖型の構造体が配置され、これらを根元のピンを支持点として持ち上げることによって上棟することができる。

このような構造体によって形成された大空間の中に、設備コアのユニットと個室を配置することで設計が完了し、コア上部のロフトはセミプライベートルーム、それ以外の空間はセミパブリック空間として定義される。

この家の使われ方として、都心の密集地でもつことのできなかつた「書斎」や「スタジオ」のような、自らの個性を解放し共有することのできる二拠点目としての利用を想定している。

このように、自由に構想することによって生まれる理想の住まいを、安く簡単につくることができる

仕組みを提供することで、家づくりを一般の人々に開放していくことが、われわれのねらいである。当然のことながら、本特集の趣旨にあるような個室の復興というテーマもその射程にあるのだが、一拠点目のメインの居住地における小さな離れというよりは、都心から少し離れた広大なキャンパスの中に設置する「理想のアトリエ」として、必要最低限の水まわりと寝具を備えた小屋という個室を、ここでは提案したいと思う。





小規模ながら
大空間を実現する
工法の開発

組み立てが簡単なのに大空間を得ることができる構造のおかげで、ロフトまでも確保。空間内にも公私のグラデーションが。



Akiyoshi Koki

写真/Toru Hiraiwa



Nagaoka Ben

Profile

秋吉浩気

あきよし・こうき

1988年大阪府生まれ。芝浦工業大学工学部建築学科卒業後、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科X-DESIGN領域にてデジタルファブリケーションを専攻。2017年にVUILD創業、「建築の民主化」を目指す。デジタルファブリケーションやソーシャルデザインなど、モノからコトまで幅広いデザイン領域をカバーする。おもな作品「まれびとの家」(19)、「キャックガーデンオフィス」(19)、「CAM PPOD」(20)。

長岡勉

ながおか・べん

1970年東京都生まれ。97年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。山下設計で活動後、99年にPOINTを設立。建築・インテリアの設計業務のほかに、シェアオフィス(OFFICE)の設立に参加するなどの活動を行う。2020年4月からVUILDのメンバーとしても活動。現在、慶應義塾大学・武蔵野美術大学非常勤講師。

作品名 あなたとの距離、わたしの個室

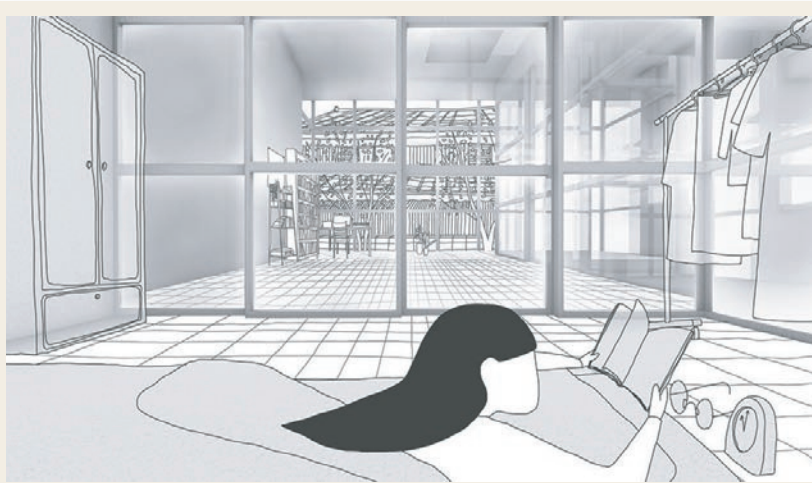
建築家 宮原真美子+中島弘陽 Work Well Home with COVID-19

レンズによって
近づいたり遠のいたりする世界。
私たちの感覚は
繊細でもあり、曖昧でもある。



← 1

ワークスペースから凸レンズ越しに外を見ると、緑と隣の民家が拡大され視界に飛び込んでくる。



← 2

就寝スペースから凹レンズ越しにワークスペースを見ると、縮小され遠くにあるように感じる。

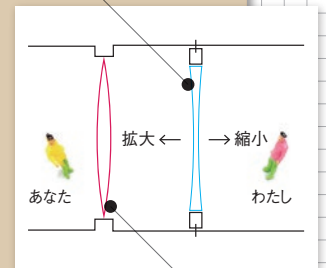
空間に 設置される レンズ

コロナ禍において人と人とのあいだに設置されるようになったアクリル板を凹凸レンズに置き換える。

建具

凹レンズ

建具をあなた側に動かすと、あなたは拡大され（近づき）、わたし側に動かすと、あなたは縮小される（離れる）。



壁

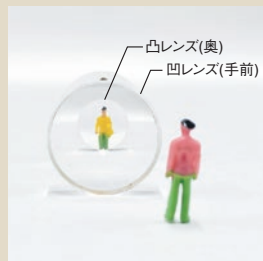
凸レンズ

レンズ越しの人や外の世界を拡大して（近づけて）映す。



凹レンズ越しの凸レンズ①

凸レンズで拡大されたあなたは、凹レンズで縮小され、もとの距離まで離れる。



凹レンズ越しの凸レンズ②

わたし側へ凹レンズを移動させるとあなたは、さらに縮小され遠くへ離れる。

視覚から距離感を問い直す

緊急事態宣言下で強いられた「ステイホーム」と「ソーシャルディスタンス」によって狂ってしまった“わたし”と“誰か”との距離。

宮原さん、中島さんは今回の体験を潔いほどに正面から取り上げ対峙した。

凹凸レンズを、とある大学院生の自宅(G邸)の個室の境界に組み込んで、感覚を問いかけようというインスタレーション的な改修提案。

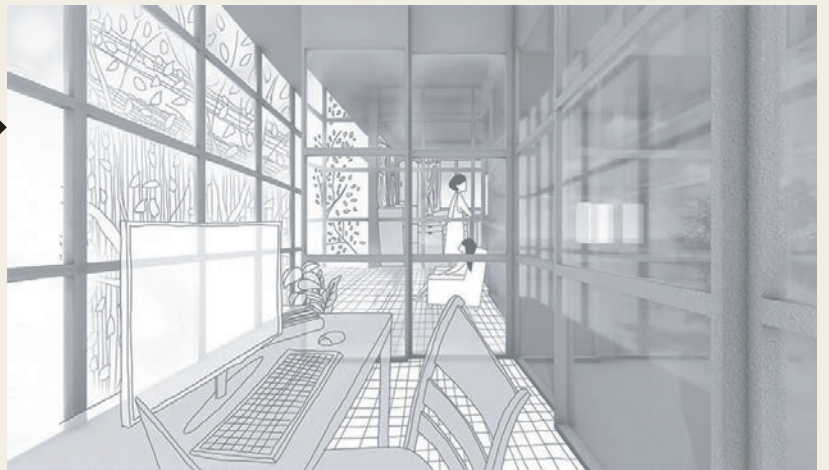
3 →

読書スペースから凸レンズ越しにダイニングにいる両親を見る。拡大され実際の距離よりずっと近く感じられる。



4 →

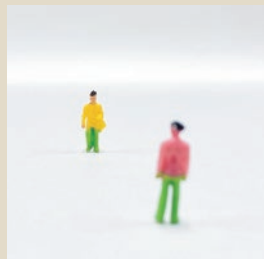
ワークスペースから凹レンズ+凸レンズ越しに見ると、手前のわたしは縮小され遠くに、キッチンに立つ母は再び拡大されて近くに感じる。



① …………… 番号は次ページの平面図の番号と対応。

レンズの組み合わせと対人距離

従来の、レンズのない±0の距離は、凹凸レンズの組み合わせによって拡大・縮小される。



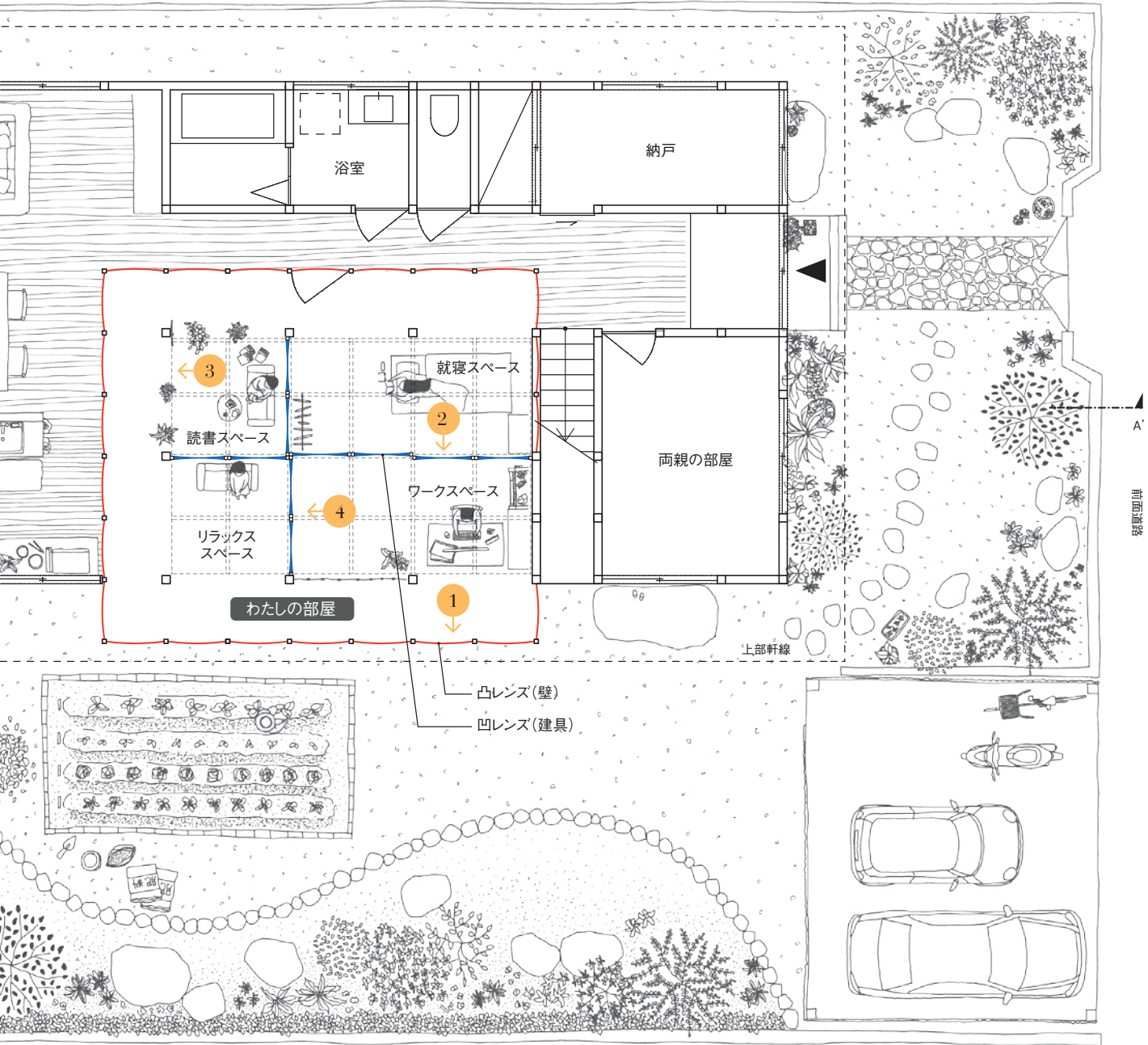
レンズなしの対人距離

自分が移動することで、密接距離から公衆距離を調整していた(従来)。



凸レンズ越しの対人距離

実際の距離は変わらないが、凸レンズ越しのあなたとの距離は近づく。

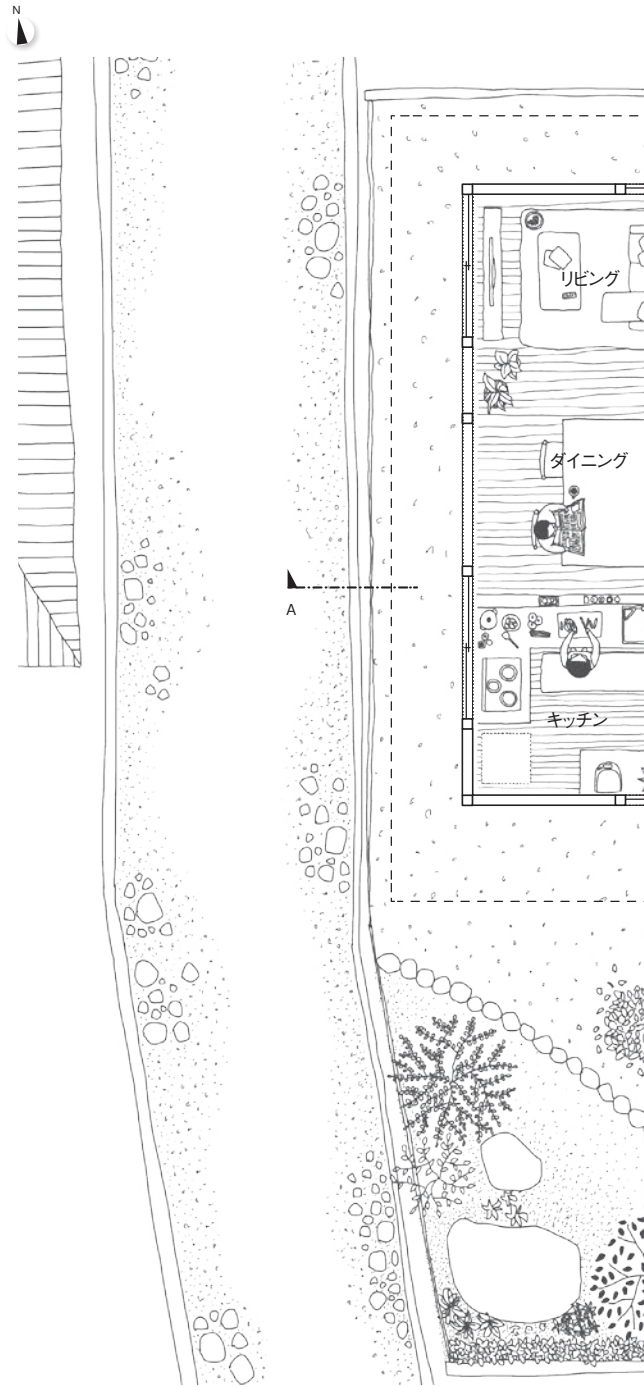
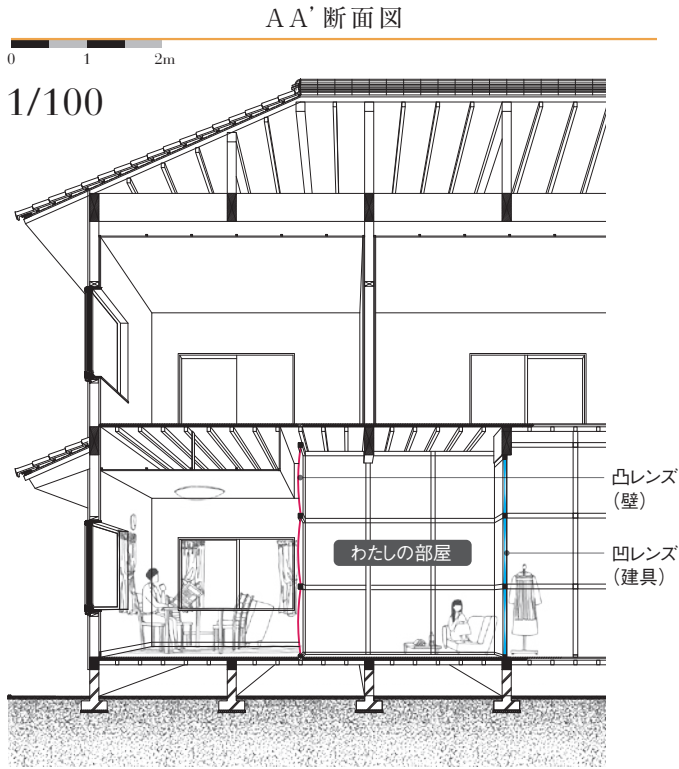


植物のように 根を下ろした人間

これまでの個室の提案は、都市が提供するサービスを、気ままに、誰にも干渉されず、自由に、選択できる生き方を前提としてきたが、コロナ禍の私たちが経験したのは、自分を取り巻く環境との関係を選択できない受動的な生き方 (= Stay Home) だった。自粛生活では四六時中家族と顔を合わせるようになったが、適度な距離を保つには日本の住宅は小さすぎた。また、家の中に変化がないので、ベランダのミニトマト、塀を歩く猫揺れる木々など、これまで目に止まらなかった窓の外の変化に幸せを感じるようになった。

アクリル板で ゆがめられた距離

他者とのあいだに確保すべき距離として、ソーシャルディスタンスという言葉が多用された。本来ソーシャルディスタンスとは、アメリカの文化人類学者エドワード・ホールが提唱した対人距離の型のひとつであり、「密接距離」「個体距離」「社会距離」「公衆距離」の四段階で対人距離を調整したり確保された距離の



Miyahara Mamiko



Nakajima Hiroaki

Profile

Work Well Home
with COVID-19

「緊急事態宣言下の住まいの実情は、テレワークによりどう変わったのか？」をテーマに、在宅勤務について調査している建築計画研究者らのチーム。アンケート調査とオンラインインタビューにより、在宅勤務時に起こる空間的課題や、勤務・育児・家事・余暇など時間のマネージメントによる課題を抽出し、これからのテレワーク環境の改善について考察している。

制作／宮原真美子（みややはらまみこ）、佐賀大学理工学部建築環境デザインコース准教授、中島弘陽（なかじまひろあき）、日建設計

制作協力／源五郎丸未来・西田晃大（佐賀大学大学院建築環境デザインコース修士2年）

意味を読み取ったりしながら、他者とのコミュニケーションを行うスペースング機構として理解される。しかし、コロナ禍ではコンビニでも会議室でもありとあらゆるコミュニケーションの場で、感染予防の亚克力板やビニールパーティションが置かれ、ソーシャルディスタンスが固定的な数値として用いられるようになった。

凹凸レンズ越しの
あなたとの距離

本提案では、動けなくなったわたしが家族や外界とのディスタンスング力を取り戻すべく、視覚的に対人距離を縮めたり離したりする凹凸レンズを使った個室の改修提案である。あなたとわたしのあいだに置かれたアクリル板に代わり、凹凸レンズを設置する。凸レンズ（図面内赤色）はレンズ越しのあなたや外の世界を拡大し（図1、3）、凹レンズ（図面内青色）は拡大されたあなたを縮小し映し出す（図2、4）。わたしは、凹レンズが入った建具を移動させ、あなたとの距離を調整する。

作品名 個室でみる夢

建築家 大室佑介

風景の中に
次のアトリエの姿を
夢想する。

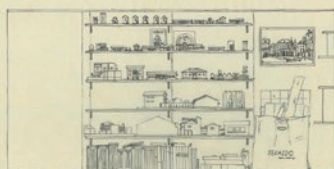


曖昧さこそ個室の魅力

大室さんが、個室といわれて思い描いたのはアトリエだ。
制作を行う職場でもあるが、休息や夢想といった、
仕事とはまた異なる至極個人的な行為の場でもある。
作品への昇華・発散と、閉じこもった思索が行き来する場所こそがアトリエで、
それこそ純粹かつ究極の個室かもしれない。

現在のアトリエから見える景色。中央の建物は、大室さんが営む「私立大室美術館」。次なる個室=アトリエは、その隣にそっとたたずむ塔状の建物、か。





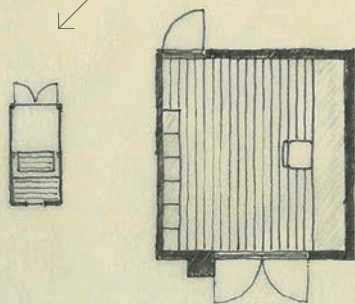
4

模型がひしめく東側の棚

2010年

第1.5期

新築で建物を建てる機会に恵まれないうち、自邸と称した小屋をつくった。1畳の個室や0.5畳のトイレ・収納などの個室を置けばどこでも家になると考え、空地や駐車場、畑の真ん中などで過ごし、計画案を練ったり、筆をとったりした。



2008 ~ 2010年

第1期

7畳ほどの部屋に、板と格安のカラーボックスを組み合わせて、机と本棚を設けた。南に庭を望み、もともとあった引き違いのアルミサッシをはずして板をはめ、開り口のような小さな開口を設え、自身の出入りと、滅多にない来客の出入りとを分けていた。

1/135

0 1 2m

過去から未来まで
アトリエに向き合うこととは
自分を見つめ直すことにも
つながっている。

← 移り変わる その時々 のアトリエ

使い勝手や居心地を丁寧にかめながら、試行錯誤がされてきた。模様替えから改修、新設までレベルはさまざま。

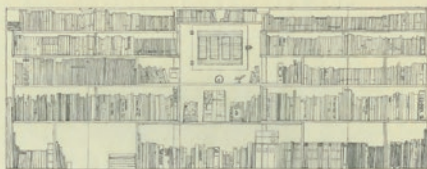
私のアトリエ遍歴、 今、これから。

独立とは名ばかりの低空飛行を始めて12年、拠点を東京から三重に移して6年目になるが、そのあいだ、自宅の外に部屋を間借りすることなく、住まいの一室を改修し「アトリエ」として使いながら建築について考えてきた。職住一体という聞こえはいいが、家賃や維持費の心配をせずに24時間いつでも仕事ができる環境は、集中力と経済力

を欠いた自身の性分に適しているらしく、幸か不幸か建築の仕事が続けることができています。現在身を置いている三重のアトリエは、岳父が残してくれた平屋建ての屋根裏部分にあたり、折り畳み式の梯子階段を使って出入りする。広さは10畳ほどあるものの、天井の高さが1・8m弱しかないため、ひとりで過ごすにしても適度な圧迫感がある。壁三面はそれぞれ、読み書きその他の作業をするための机、検討用の模型とコレクションとしての模型が混在する模型棚、

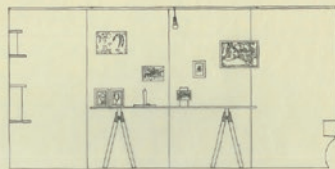
手元に置いておきたい本や画集が納められた本棚に充てられ、壁の所々には数葉の写真や絵、そして、季節や時間の動きを提示してくれる小さな窓が穿たれている。その窓から外を眺めながら、私は今、風景の中に小さな塔状の建物を夢想している。道を挟んだ休耕地の真ん中に立ち、広さは2畳ほど、高さは4・5mほどの細長いシルエットの簡素な木造の建物で、職人に依頼することなく自身の手でつくることになる。用途はとくに定めて

いない。机と椅子を置いて作業小屋にしてもいいし、本を持っていき読書をするのもいい。画家や彫刻家の作品を置けば美術館としても機能することだろう。自身にとって「アトリエ」は、事務所ほどオープンな場ではなく、書斎ほどクローズな場でもない、ほどよい距離に位置し、書くこと・読むこと・見る（眺める）ことの三つの行為を通じて、「大きな柔軟性があり、輪郭が不明瞭な夢想」(バシユラール)をするための場所である。



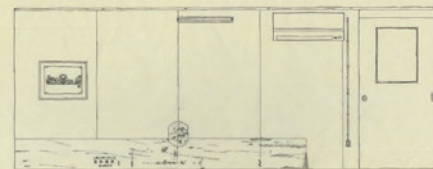
1

ぎっしり本が並ぶ棚と窓



2

読み書きや作業のための机



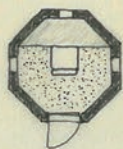
3

広い合板の壁と扉

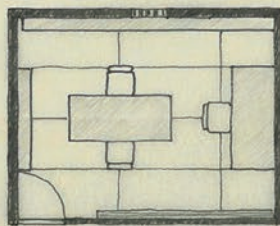
2021年

第3.5期

アトリエから見える風景の中にたたずむ、小さな塔状の建物の計画。工場を改修した「私立大室美術館」に隣接し、仕事場もしくは美術館として機能することを期待している。

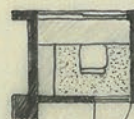


4



1

2



3

2016年～

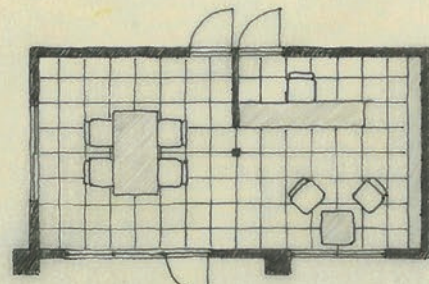
第3期

三重県の山里に越し、岳父の残した家の屋根裏部屋を利用してアトリエとした。全6面とも合板現しの簡素な部屋で、南側の壁に設けられた小窓から、堅固な格子越しに外の風景が見えることが唯一の救いとなっている。

2015年

第2.5期

自宅内に残されていた1.5畳ほどの小部屋を仕事場とし、熱さ寒さを耐えながら蠟燭のあかりで作業をした。2畳間で執筆を続けた私小説家・川崎長太郎への憧れと同時に、どこか公共の色合いがみえてきたアトリエスペースからの逃避でもあった。



2011～2015年

第2期

第1期のアトリエと隣室を隔てる壁を部分的に取り払い、机、壁面を使った本棚を新設した。庭に面する窓は木製の物に変え、開り口ではない扉を設けた。広いスペースが確保できたため、打ち合わせや酒宴など、人の出入りがあるアトリエとなった。

① …………… 展開図と第3期(現在)の平面図の番号が対応。



Omuro Yusuke

Profile

大室佑介

おおむろ・ゆうすけ
1981年東京都生まれ。
2007年多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了。07年磯崎新アトリエ。09年大室アトリエ/atelier Ichiku設立。おもな作品「H A U S - 0 0 4」(15)、「私小説家・川崎長太郎の物置小屋再建計画」(15)、「私立大室美術館」(15)。

人口や家族構成といった現実的な社会問題を、事例から丁寧に分析し、その未来を描くという本案。金野さんは、個室そのものという狭い範疇を離れ、周囲に多様な空間を誘発し、豊かな関係性を構築することこそが個の生活を支えるのだ、という広い視座から提案する。

作品名 上原のすまい

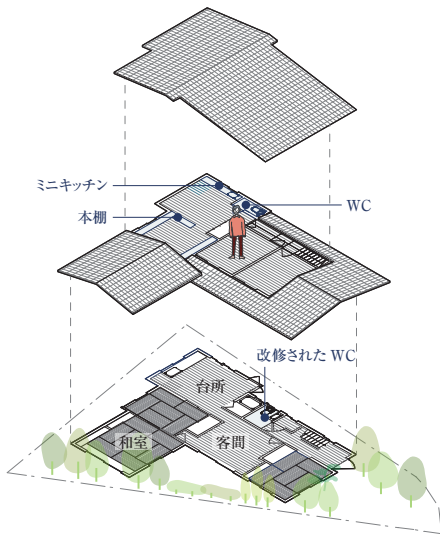
建築家 金野千恵 teco

Phase

4

2008年～

2階西側にWCとミニキッチンが設置される。手すりの設置やWCの拡張などバリアフリー化の改修が行われる。

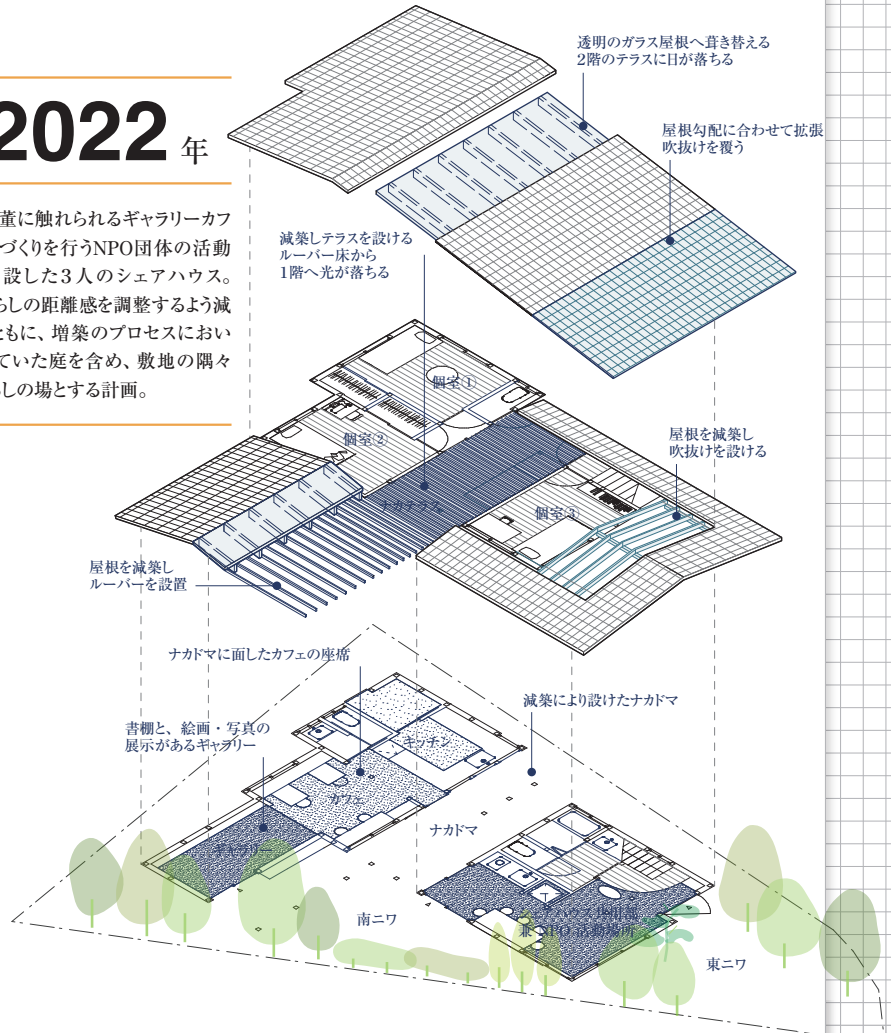


Phase

5

2022年

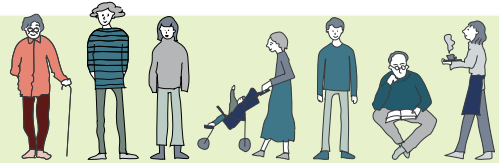
書籍や骨董に触れられるギャラリーカフェと、ものづくりを行うNPO団体の活動場所を併設した3人のシェアハウス。個々の暮らしの距離感を調整するよう減築するとともに、増築のプロセスにおいて縮小していた庭を含め、敷地の隅々までを暮らしの場とする計画。



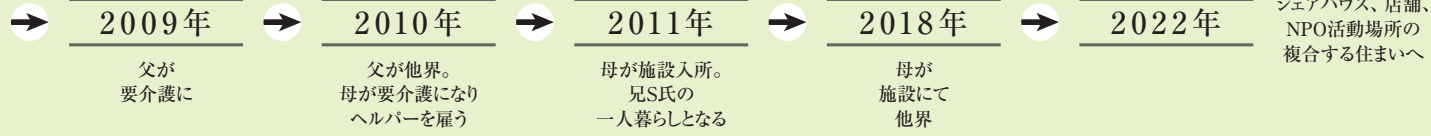
2010年の住人



2011年の住人

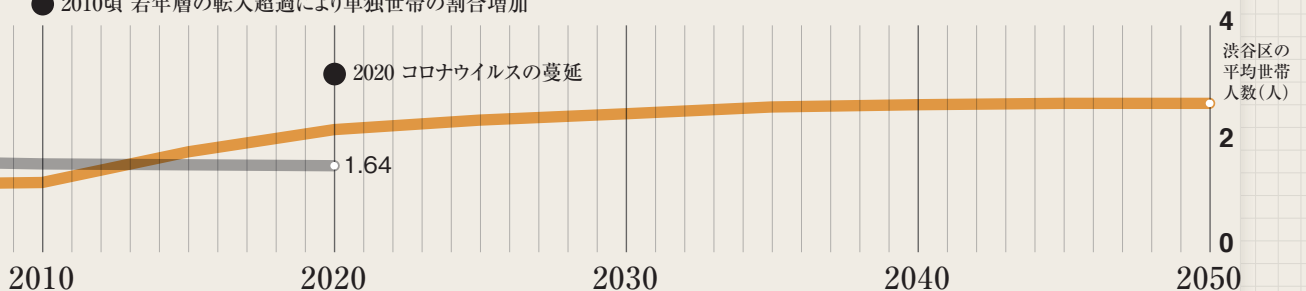


Phase5/2022年の住人



● 2010頃 若年層の転入超過により単独世帯の割合増加

● 2020 コロナウイルスの蔓延



共存が「個の自立」を成り立たせる

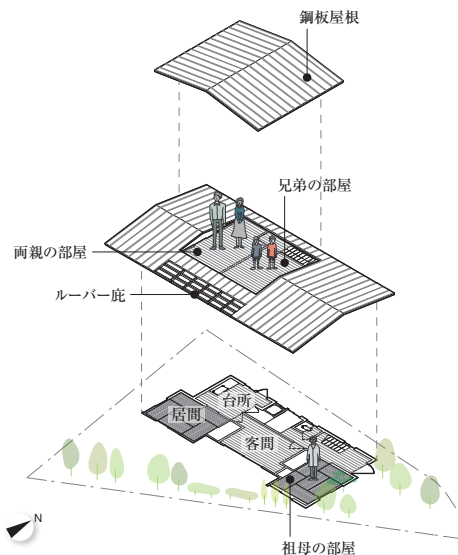
「上原のすまい」のあゆみ

Phase

1

1967年～

南面配置の敷地の半分が庭の木造2階建て。庭に面した1階客間にはルーバー庇から光が落ちる。両親、兄弟、祖母で3つの個室を使用し、度々客間に来客がある。

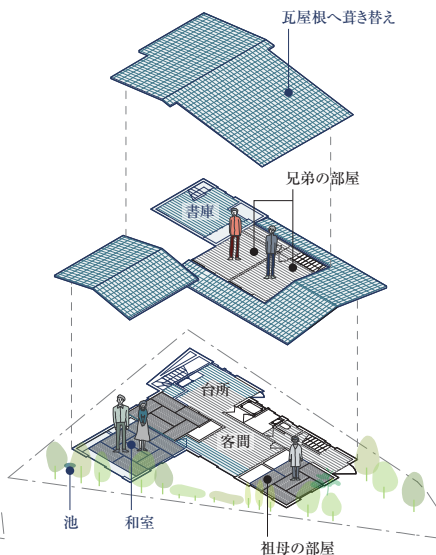


Phase

2

1975年頃～

1階庭側に和室、2階西側に書庫が増築される。それに伴い階段を増設し、キッチンも改修。兄弟が中高生になり個室が与えられる。

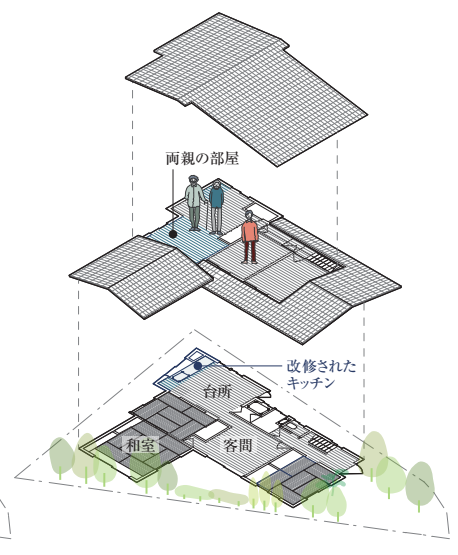


Phase

3

2000年頃～

1階西側の階段が撤去され、キッチンが拡大。2階書庫が増築され、ここが両親の部屋になる。



S氏家の住人の変遷



Phase1/1967年の住人

1967年～

上原のすまい竣工。
両親と兄弟、
祖母が暮らす



Phase2/1975年頃の住人

1975年頃

西側の増築、
兄弟に個室が
与えられる



1990年頃の住人

1990年頃

弟が家を出る



Phase3

2000年

1階西側
階段撤去、
キッチン改修

2001年の住人

2001年

祖母が他界

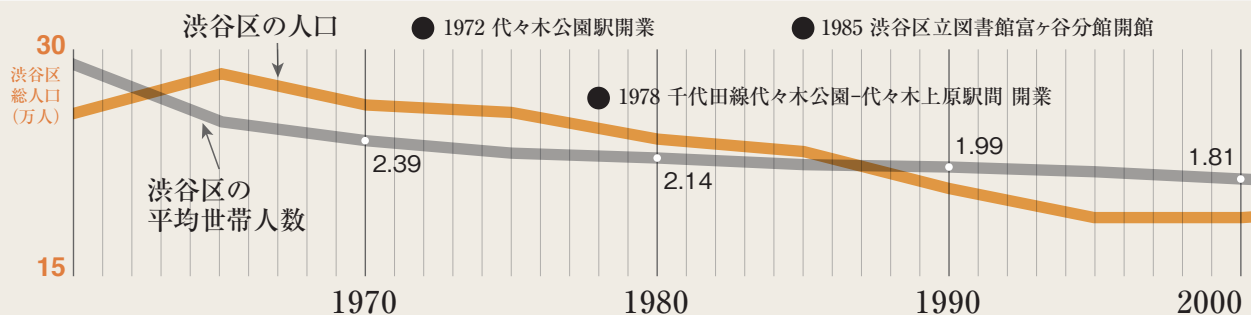
Phase4

2008年

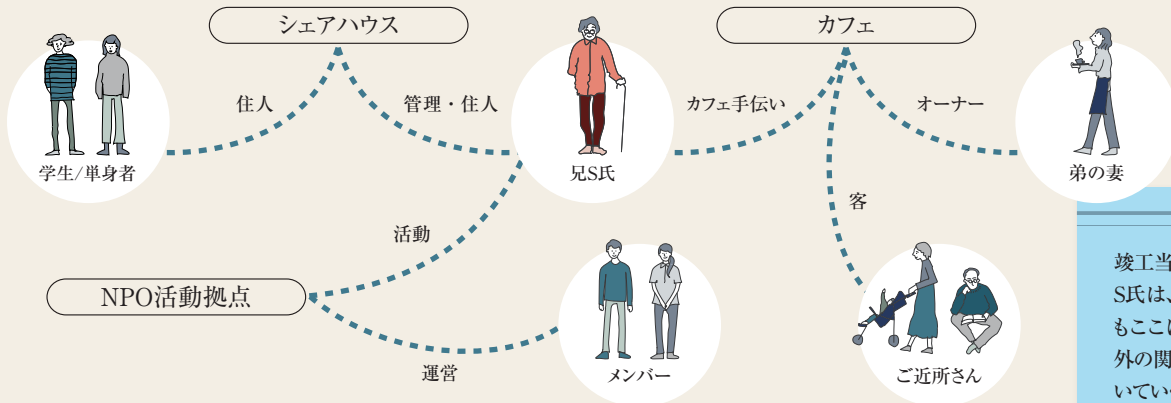
両親が兄との
2世帯を想定し
改築

渋谷区の人口と世帯人数の変化

「上原のすまい」のある渋谷区の今までとこれから。今後も単独世帯の割合増加が予想される。



「上原のすまい」住人の関連図



竣工当時、小学生だったS氏は、50年を超えた今もここに住まう。家族以外の関係性をこれから築いていくことで、空間を未来に向けて更新する。

50年を経て考える 自立のための開く家

私たちの暮らす現代社会では、都市部への人口集中、高齢化、独居世帯の増加、空き家増加など、戦後の一大家族＝一住戸という仕組みに不調和が生じている。かつては個室の充実が自立を支えたが、今では必ずしもそれが成立しない。個人が自立して豊かに暮らす方法として、頼れる依存先を増やす、外界との関係により暮らしの輪郭を描く、といった可能性を拓いていく必要がある。家族に限定せずに隣人や頼れる他者といった依存先を増やすには、まず、住まいに関わるメンバーを組み替える必要がある。さらに、個の暮らしの輪郭を形づくるような、日々刻々と変化する自然現象、植物の生育、依存できる他者など、リズムをもつ外界との関係を豊かにする空間へ、住まいが更新される必要がある。

「上原のすまい」は、1967年の竣工後、複数回にわたる改築、改修を経た住まいの四度目の改築計画である。竣工当時小学生だったS氏は、五度の家族構成の変化と三度の建築構成の

変化を経て、現在は空き部屋の多いこの住まいでひとり、暮らしている。ここで今後も自立して暮らしつつけるために、家族以外のメンバーが集い、個室の外側をさまざまに感じられる空間へと更新する計画。3人の住まうシェアハウス「書棚や骨董ギャラリーを含むカフェ」ものづくりと販売をするNPOの活動場所」という、小さな機能の複合拠点である。まず、住宅の中央部分を減築してナカドマを設け、接道する坂道から既存の床高さへのアクセスを容易にするとともに、南に広がる庭の緑を広く感じられる構成とした。

室を増築してきた現状の建物ボリュームのうち庭側をさらに減築し、既存の瓦屋根を生かしながらも部分的にガラスやルーバーの屋根に置換していく。同時に、基礎や柱など建築部位の減築を丁寧設計することで、内部空間を減らしながらも、庭と一帯に活動の空間を広げていく。ひとつの庭付き木造住宅が家族構成の変化を経て、ひとりの自立した暮らしを支えることを契機に、多様な役割を担う空間へとしなやかに代謝していく計画である。

南ニワから見る



出典
 家族の歴史／施主からのヒアリングより。
 建物の変遷／竣工図面、計画図面より。
 既存と不明箇所は一部、類推により作成。
 2020年以前の人口と世帯平均人口／
 渋谷区人口ビジョン令和2年改訂版、国勢調査より。
 2020年以降の人口／
 渋谷区人口ビジョン令和2年改訂版より。
 鉄道駅の開業年／公益財団法人メトロ文化財団
 メトロアーカイブアルバムHPより。
 渋谷区立図書館富ヶ谷分館開館年／
 図書館へのヒアリングより。

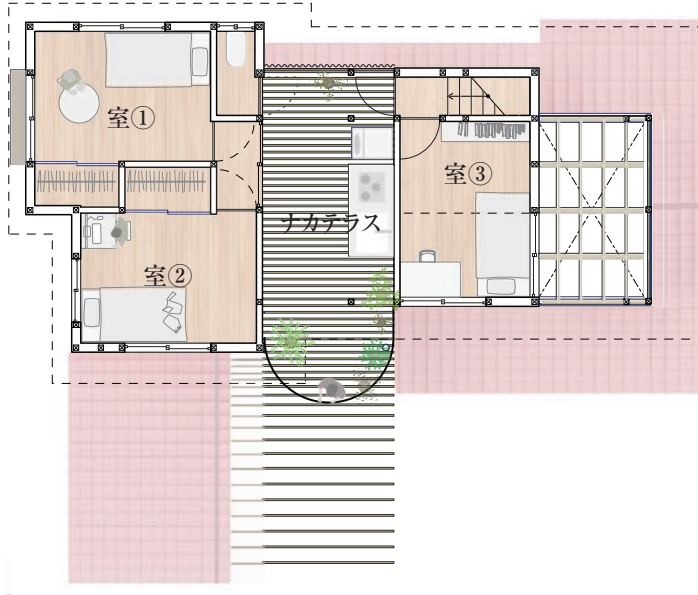
2022年「上原のすまい」Phase5

0 1 2m

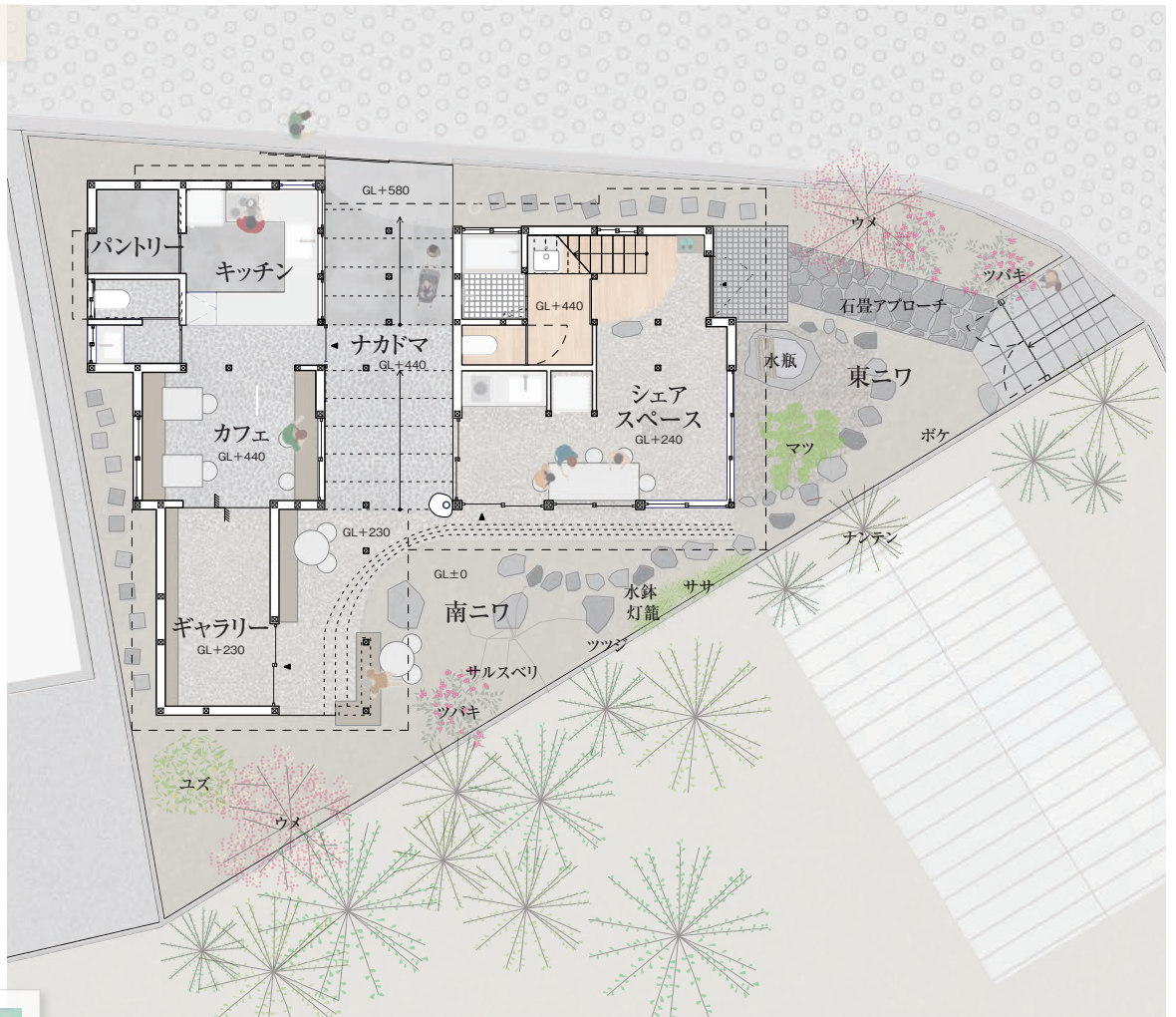
1/150



2階平面図



1階平面図



Konno Chie

Profile

金野千恵

こんの・ちえ

1981年神奈川県生まれ。2005年東京工業大学工学部建築学科卒業。05年スイス連邦工科大学派遣交換留学プログラム奨学生。11年同大学院理工学研究科建築学専攻博士課程修了。博士(工学)。神戸芸術工科大学大学院助手、日本工業大学助教などを経て、15年 t e c o 設立。21年より京都工芸繊維大学特任准教授。おもな作品「向陽ロジアハウス」(11)、「二連旗竿の家」(16)、「幼・老・食の堂」(17)。

個室をめぐる

生活者の

想像力／創造力

Special Feature
Return
Of
the Private
Room

山本理奈

Yamamoto Rina

個室とは何か。そもそも、個室とは誰のための空間なのか。

多くの人は、自分の家族が暮らす個別の部屋のことや、子どもたちのそれぞれの顔などを、思い浮かべるのではないだろうか。一見、自明にも思えるこれらの問いに対し、やや特異なかたちで取り組み、戦後日本における住まいのあり方を問い直した建築家がいた。黒沢隆(*1)である。

黒沢隆が問う「個室」

なぜ特異であるのか。それは黒沢が、家族という住まい手を前提とせずに、個室を基盤とする住居の可能性を検討したからである。よく知られているように、黒沢は「個室群住居」と呼ばれる都市の新たな住様式を提唱し、「ホシカワ・キュービクルズ」(*2)や「コワン・キ・ソ・ンヌ」(*3)に代表される一連の建築、および『個室群

ひとことで「個室」といつても、それは時代ごとに変化し形成されてきた。

今、個室はどうあるべきかを、建築家たちと考える一方で、

ここでは「個室」という概念の本質についてあらためてとらえ返すことにしたい。

社会学のフィールドから

住宅史や居住政策を研究している

山本理奈さんにご寄稿いただいた。

住居——崩壊する近代家族と建築的課題』(住まいの図書館出版局)などの関連する著作を生み出してきた。

これらの作品を貫くのは、近代住居の一般的な考え方や対する批判的なまなざしである。いい換えれば、家族と住まいを無意識のうちに結びつけ、空間を用途によって理解する思考の慣性、その自明性を問い直す視点だといえるだろう。そこでまず、黒沢が、近代住居をめぐって何を問題にし、個室の本質をどのようにとらえていたのか。これらの点を確認することしよう。

近代住居は、「居間(リビングルーム) + 人数分の寝室(ベッドルーム)」という空間構成でとらえられることが多いが、こうした機能主義的な理解の仕方は、「寝室」とひとくくりに呼ばれる空間の質的差異を見落としていると、黒沢は指摘する。黒沢によれば、近代住居において、寝るという行為に特化した空間は「夫婦の寝室」のみであり、「子ども部屋」は単なる寝室ではないという。なぜなら、子ども部屋は睡眠のほかにも、勉強したり、

*1

黒沢隆

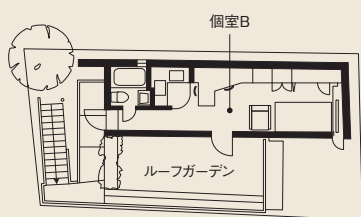
くろさわ・たかし／建築家、建築評論家。1941年東京都生まれ。71年日本大学大学院博士課程修了。現代的な生活形態に応じた新しい住まいのあり方として「個室群住居」を提示した。おもな著書『集合住宅原論の試み』(鹿島出版会)など。2014年逝去。

*2

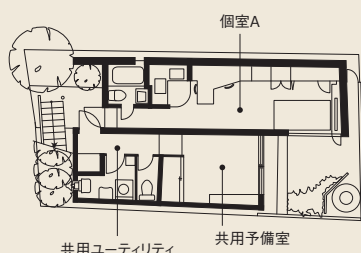
ホシカワ・キュービクルズ

黒沢が設計した個人住宅、1977年竣工。家庭から出て社会のなかに営まれる「個人用居住単位」の最小面積を模索。共用予備室も装備した。

2階平面図



1階平面図



友と語りあったりとさまざまな行為が行われており、寝るといふ行為のみには還元できない「多機能空間」となっているからである。そのため黒沢は、近代住居の一般的なあり方は、「居間＋夫婦の寝室＋人数分の子ども部屋」から構成されていると指摘し、子ども部屋こそが個室の原型であると、「個室群住居」の構想へとつながる独自の見解を示している。

ここで重要なことは、黒沢が、近代住居に対する機能主義的な思考を批判している点である。通常、近代住居では、住まい手として核家族が想定されているため、居間は家族の団らんのための空間、寝室は家族のメンバーが寝るための空間としてとらえられている。このように用途に応じて、各空間を単一の機能に還元する機能主義的な思考を、黒沢は問題視していた。

加えて、黒沢のユニークな点は、単なる機能主義批判に終わるのではなく、近代住居のなかで、子ども部屋が、そこで行われている行為の内実と照らし合わせてみると、機能主義的な思考では説明しきれない多機能空間となっている点に着目した点である。そしてこの「多機能性」こそが、個室の本質であり、「個室群住居」という都市の新たな住様式を構想するうえで必要不可欠な要素であると、黒沢は考えていた。

こうした機能主義批判を通して、黒沢が空間の「多機能性」という論点を提起したのは、1960年代後半のことである。この時期、それと軌を一にしながら、建築

計画学者からも空間の「多機能性」という論点が、住まい方調査を通して提起されていた。そこで次に、建築計画学者が住まい方調査を通して何を発見し、なぜ多機能性という論点を提起するに至ったのか、この点を確認することにしよう。

建築計画学における「生きられる個室」の発見

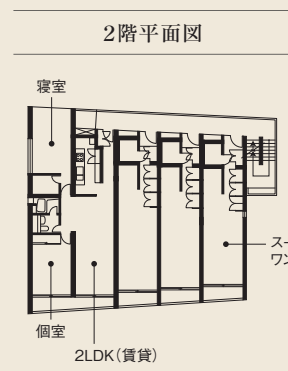
これまで建築計画学の分野では、人々の実際の居住生活を調べるために、住まい方調査が行われてきた。その先駆者として知られる西山卯三（*4）は、大阪・京都・名古屋の三大都市を中心に調査を行い、どんなに小さな住まいでも「食べるところ」と「寝るところ」を分けて生活しているという事実を発見する。そしてこれを「食寝分離」と名づけ、プラン

ニングの基本に据える必要性を説いた。また西山は、住まい方調査を通して、赤ん坊が就寝中に押しつぶされたり、年頃の男女が一緒に部屋で就寝したりといった、当時の「過密就寝」や「混合就寝」という問題を発見し、その解決の必要性も指摘していた。つまり、住居の計画をする際には、食寝だけでなく就寝の分離も考えなければならないという問題意識を提起していた。

吉武泰水（*5）研究室では、こうした西山の研究手法や問題意識を継承しつつ、戦後の庶民住宅を対象に食

*3
コワン・キ・ソヌヌ

黒沢が設計した集合住宅、1986年竣工。初めて分譲方式の集合住宅を設計することとなり、あらためて個人用居住単位を再考したという作品。



*4
西山卯三

にしやま・うぞう／建築学者、都市計画家。1911年大阪府生まれ。33年京都帝国大学建築学科卒業。戦後の住宅計画の主流となったDK型の誕生に大きな影響を与えた。おもな著書「これからのすまい 住様式の話」（相模書房）、「住み方の記」（文藝春秋新社）など。94年逝去。

寝関係の実態を明らかにする調査を行っていた。その結果、西山と同様に「食寝分離」の傾向を確認したが、それだけではなく、「寝室分解」の促される程度が間取りによって異なることを発見した。そして、これらの調査結果から得られた知見に基づき、公営住宅の標準設計である「51C」(*6)というプランを作成したのであった。

この「51C」というプランは、庶民の小住宅として考えられたものであり、12坪というきわめて限られた面積のなかで、二寝室を確保し、そのうえでいかに「食寝分離」と「就寝分離」を両立させるかという課題に対して出された解決策であった。その後、このプランは公営住宅のみならず、住宅公社や住宅協会（住宅供給公社の前身）、さらに日本住宅公団の標準設計にも受け継がれ、公共住宅の基本的な「型」として大都市を中心に全国で普及していくことになる。

当時、公団住宅の代表的な標準設計とされていた「2DK」は、「51C」の考え方をほぼ踏襲しており、その特徴は、食事のできる少し広めの台所として「ダイニング・キッチン」(DK)を設けたこと、畳敷きの和室のあいだに壁を設け隔離したことにある。つまり、これらの工夫により、「食寝分離」と「就寝分離」を両立させようとしたわけである。具体的には、中のリビング的な居住生活を、DKとそれに接する畳の部屋を合わせたスペースで行い、夜間はその畳の部屋を再度使用し、ふたつの和室に分かれて就寝するという住まい方を、設計者の側は想定していた。

しかし、鈴木成文(*7)を中心とする、1960年代に行われた公団住宅の住まい方調査から、人々の実際の居住生活は、設計者の想定とは異なることがわかった。具体的には、DKに接する畳の部屋には、ソファやテーブル、ピアノや飾り棚、テレビやステレオなどが置かれ、DKとのあいだの襖は取り払われてワンルーム化し、絨毯が敷かれて洋風居間(リビングルーム)のような空間となっていることが明らかとなった。その結果、「寝室分解」は思いのほか進まなかったという。

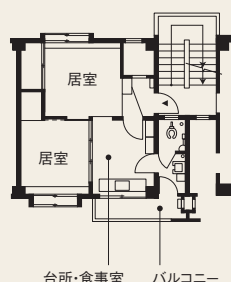
人々は
間取りにはなかった
リビング的な空間を
生活の実践から
生み出していたのです。

— Yamamoto Rina

*5
吉武泰水
よしたけ・やすみ／建築学者。1916年大分県生まれ。39年東京帝国大学工学部建築学科卒業。集合住宅のプロタイプ「51C型」の提唱で知られる。おもな著書『建築計画の研究』鹿島出版会など。2003年逝去。

*6
51C
1951年に全国の公営住宅の標準設計として考案された平面計画。12坪という狭い空間に「食寝分離」と「就寝分離」を同時に実現させるため、二部屋の居室と、台所・食事室を別に設けた。

公営住宅標準設計51C型



*7
鈴木成文
すずき・しげぶみ／建築学者。1927年東京都生まれ。50年東京大学第二工学部建築学科卒業。55年東京大学大学院修了。吉武泰水のもとで建築計画学を研究し「51C型」の公営住宅の原型を提案した。おもな著書『51C白書 私の建築計画学戦後史』(住まいの図書館出版局)など。2010年逝去。

かかれて寝ることよりも、リビング的空間を確保することを優先したのである。そして建築計画学者は、この新たな空間——DKとそれに接する畳の部屋をワンルーム化して生み出されたLDK的な空間——の本質を、「多機能性」の次元に見出していた。

通常、リビングルームを中心とするLDK空間は、家族の団らんのための空間として、機能主義的に理解されることが多い。しかし西山は、住まい方調査を通して、LDK空間では、食事や団らんだけではなく、社交や娯楽など、じつにさまざまな生活実践が行われており、団

らんとする一つの機能には還元できないと指摘していた。この点については、住田昌二（*8）も同様の見解を示しており、人々の「行為」を分析する限り、LDK空間は多機能空間であると指摘していた。また鈴木は、家電製品や家具の配置といった「しつらえ」を分析し、LDK空間は団らんのための空間というよりもむしろ、テレビやソファなど、三種の神器にはじまる耐久消費財をディスプレイする空間になっていると指摘していた。

生活者の視点と「多機能性」の提起

こうした建築計画学者たちの指摘は、何を意味しているのだろうか。いい換えれば、彼らはなぜ、多機能性という論点を提起したのだろうか。それは、当時の高度経済成長を背景とする都市化や産業化といった社会の構造的な変容が、人々の生活様式を変え、住まい方を変えたことを、彼らが調査を通して気づいていたからである。つまり、都市化や産業化に媒介された大衆消費社会の到来があつてはじめて、「生きられるLDK」とでも呼ぶべき多機能空間が、設計者の想定を裏切つて出現したことを、彼らは問題視していたのである。

黒沢とほぼ同じ時期に、建築計画学者が空間の「多機能性」に着目したことは、決して単なる偶然ではない。なぜなら、黒沢が子どもたちの実際の生活のありように着目したように、建築計画学者もまた、この「生きられるLDK」とでも呼ぶべき空間で行われていた、人々の具体的な生活実践に着目したからである。つまり両者は、

人々の暮らしの内実を見つめていたのであり、戦後の都市を中心とする新たな社会を生きる「生活者」の視点を通して、空間をとらえようとした点において共通していたのである。

これからの「個室」へ

現在、黒沢の提唱した「個室群住居」という住様式は、都市のワンルーム・マンションとして理解される傾向にある。しかし、黒沢が構想していたのは、あくまで空間と社会の関係であり、単なる物理的な建造物ではなかった点に留意が必要だろう。黒沢は、近代の機能主義的な用途地域制に基づく都市の住様式ではなく、複合用途と稠密を基本的な属性とする現代のメガロポリスに見合う、都市の新たな住様式を考えていたのである。

およそ半世紀の時を経て、私たちは今も都市を中心とする消費社会を生きている。黒沢、そして建築計画学者の軌跡を通して見えてくるのは、空間を機能主義的な思考においてとらえる陥穽から抜け出し、社会との関係においてとらえるにはどうしたらいいのか、という問いかけである。ただしこの問いかけは、建築設計に携わる一部の人間だけではなく、「生活者」としての、私たち一人ひとりにも等しく開かれていることを、忘れてならないだろう。

個室とは何か。私たちの時代の想像力／創造力が問われている。

*8

住田昌二

すみだ・しょうじ／建築学者。1933年兵庫県生まれ。62年京都大学大学院建築学専攻博士課程単位取得退学。西山卯三のもとで住宅計画・住宅政策を研究した。おもな著書『現代日本ハウジング史 1914～2006』（ミネルヴァ書房）など。

Profile

山本理奈

やまもと・りな

社会学者。東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程単位取得退学。博士（学術・東京大学）。成城大学社会イノベーション学部准教授。現代社会論、都市の住生活・居住政策、女性・家族のライフスタイルの研究に取り組んでいる。著者に『マイホーム神話の生成と臨界——住宅社会学の試み』（岩波書店）がある。



Yamamoto Rina

童話をデザインモチーフに

前の大戦で日本が無条件降伏を受諾した「ポツダム宣言」は、ベルリンから30kmほどのポツダム市ツェッティリエンホーフ宮殿で行われた会談で採択された。

市内にはもうひとつ夏の離宮としてプロイセン王国時代に建てられたロココ建築のサンスーシという宮殿もあり、ここは宮殿前の丘と一体化した段状テラスにブドウの木や格子付きの窓が並んでなかなか美しい。

ベルリンの中心部にはその街の名を冠したポツダム門があった。1989年には広場を分断していた「ベルリンの壁」が崩壊し、ヘルムート・ヤーン(*1)設計の「ソニールセンター」(2004)などができた。近くにはハンス・シャロウン(*2)設計の「ベルリン・フィルハーモニー」(1963)も健在。あの独特なワインヤード型のコンサートホールではベルリン・フィルの演奏を楽しむことができる。

その近く、ポツダム広場西の絵画館。元王宮のコレクションという収蔵品には恐れ入った。クラナハ、デュラール、カラバッジオ、レンブラント、フェルメールなど巨匠の名作がひしめいていて見応えがある。

この中級ホテルはそのポツダム広場から至近。2015年の開業。

グリムスとはなんのことかと思っていたら、グリム兄弟(*3)のことでありました。なるほどレターヘッドも「カエルの王様」。

子ども向きのホテルではないのだが、全館グリム童話のキャラクターで埋め尽くされている。客室階も各階でお話のテーマを変えていて、廊下と部屋の壁紙、廊下の横長照明、洋服掛けのフックなどは童話のモチーフ。なるほどさりげなくてなかなかかわいい。フロアを間違えにくいかもしれない。

私のルームなどは「赤ずきん」だから、ベッドのすぐ脇のビニルクロスにおばあさんに扮した狼が寝ているイラストというか模様があつて、それが枕の半分もある大きさなので、ぼんやりと目を覚ますとドキリとする。

「この狼、お腹に入っているのはおばあさんかな、それとも赤ずきんちゃんかふたりかな」などと思わず見てしまう。しかしこれはいかがなものか。日本のホテルならゼッタイングだ。

「ヘンゼルとグレーテル」のフロアもある。グリム童話にはヒトを食べるとか、復讐するとかどこか残酷なところがあるから、ホテル・インテリアのデザイン・モチーフにするには難しいと思う。そう思いませんか？

バスルーム。洗面台まわりの設計をするとティッシュペーパー、拡大鏡、ドライヤーなどが雑然として整理できないものだが、ここではアルミのボックスをミラーに取り付けてそれらをうまくまとめている。カウンターは有効利用され、自分で持ち込んだ化粧品も並べられる。タオルは下段にたたんである。さほど広くないバスルームのカウンターではこのアイデアいいかもしれない。

市内の古い建物。
「伯林(ベルリン)」と綴りたくなる。



ベルリンという街を歩きまわると、忘れられたような建物に出くわすこともある。

*1 ヘルムート・ヤーン(1940~2021)..
ドイツ生まれのアメリカ人建築家。「イリノイ州センター」(85)、「東京駅八重洲口グランルーフ」(2013)などを設計。

*2 ハンス・シャロウン(1893~1972)..
ドイツの建築家。作品に「ベルリン・フィルハーモニー」(63)、「シュミンケ邸」(33)など。戦時中もドイツにとどまった。

*3 グリム兄弟..19世紀にドイツで活躍した言語学者・文献学者・民話収集家・文学者の兄弟。各地で収集した童話、民話を編集した。代表的なものに「赤ずきん」「ヘンゼルとグレーテル」「白雪姫」「カエルの王様」「灰かぶり(シンデレラ)」などがある。



きのこのフックに
掛けられた
ドンデイス・カード。
my castle!

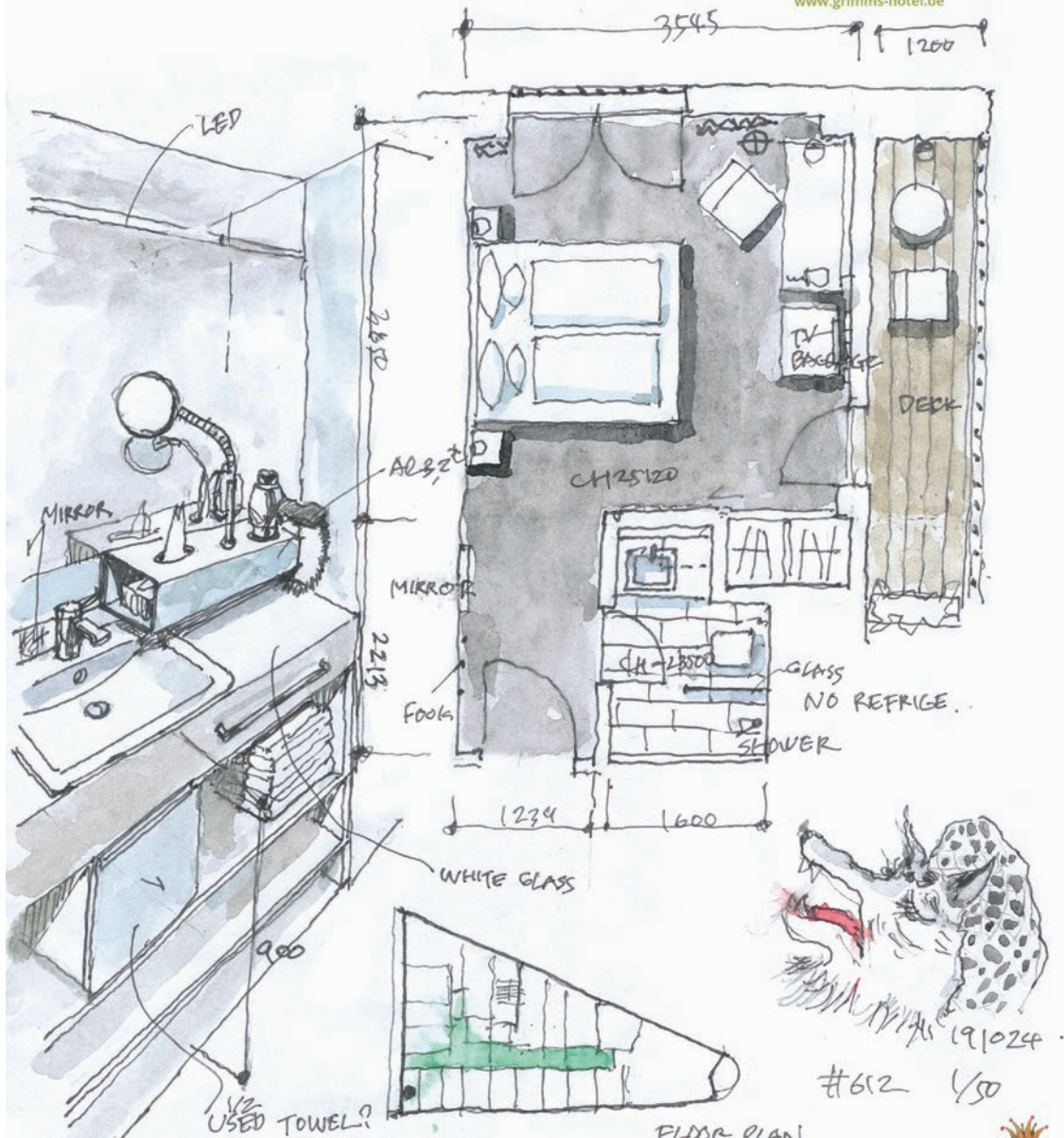
うら・かずや/建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99~2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。著書に『旅はゲストルーム(東京書籍・光文社)』、『測って描く旅(彰国社)』、『旅はゲストルームII(光文社)』がある。

Grimm's HOTELS

Grimm's Potsdamer Platz
Flottwellstraße 45, 10785 Berlin
Fon +49 (0)30 25 800 8-0, Fax -4111
potsdamer-platz@grimms-hotel.de

Grimm's Berlin Mitte
Alte Jakobstraße 100, 10179 Berlin
Fon +49 (0)30 28 44 41 -00, Fax -01
berlin-mitte@grimms-hotel.de

www.grimms-hotel.de



FLOOR PLAN

Grimm's am Potsdamer Platz GmbH & Co. KG
AG Charlottenburg HRA 50212 B, StNr.30/126/07353, USt-IdNr. DE299635791, IBAN DE97 1203 0000 1020 2879 40, BIC BYLADEM1001

Grimm's GmbH & Co. KG
AG Charlottenburg HRA 42799 B, StNr.30/126/06209, USt-IdNr. DE266462694, IBAN DE29 1009 0000 8603 5150 06, BIC BEVODE33

Geschäftsführung
Bersa Consult GmbH, Herr Munib Preljevic, AG Charlottenburg HRB 111733 B, StNr.37/265/21196, USt-IdNr. DE258126500



バスルームの備品を
うまくまとめた
アルミのボックス。

Grimm's Potsdamer Platz

Add/Flottwellstraße 45, 10785 Berlin, Germany
TEL/+49 (0) 30 25 800 8-0
URL/www.grimms-hotel.de



挟 | 梁 | を | む

旧井上房一郎邸 原設計 / アントニン・レーモンド



1
杉丸太と杉の半割材を組み合わせれば、これだけの空間を、軽々と覆うことができる。

現代住宅併走

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

連載

第五十回

写真／普後 均

(アントニン・レーモンドのポートレイトを除く)



丸太の架構には
土間がよく似
合う。障子の効果
にも注目。

2

レ

1モンドの木造は、日本の建築家に大きな影響を与えたことで知られるが、なかでも戦後の昭和26

(1951)年につくられた麻布笄町の自邸兼事務所は、ちよつと変わった波紋を周辺におよぼしている。自邸と事務所が隣り合う施設だから関係者しか入らないし、もし普通の人が入っても丸太造りの仮設建物にしか思えなかつたにちがいないが、専門家が見ると、誰でもほしくなるような質を秘めていた。

ほしいと思い、手に入れた人が少なくとも3人はいる。まず高崎の建設会社オーナーにして地元文化のパトロンだった井上房一郎が、できたばかりのレーモンド邸を訪れて感動し、図面を貸してもらい、大工を麻布に差し向けて詳細を調べ、昭和27(1952)年、そのまま高崎の自邸として実現している。

次は建築家の津端修一で、大学卒業後、完成したばかりのレーモンド事務所働き、その後、住宅公団に移り、さらに愛知県高蔵寺に自邸を建てるにあたりそっくり写している。もうひとつ、設計者不明なれど、レーモンド邸木造を使った家を、代官山で見かけたが、今は取り壊されてない。

津端邸はこのシリーズの2013年春号で取り上げ、今回は井上邸を訪れた。かつて高崎時代のタウトについて井上さんに

聞いた折、家も見ているが、ちゃんと探訪するのは初めて。

案内してくれた高崎市美術館館長の塚越潤さんによると、高校時代、美術の時間にみなでキャンパスに向かっていると、先生がいるのに突然、見知らぬおとなが入ってきて描き方の指導をするので面食らった、という。それが、絵描きを目指してパリに1923年、留学しながら、帰国後は家業を継いだ井上房一郎だった。

高崎時代のタウトについて井上さんは、「頼まれてタウトの支援はしたが、建築家としてのタウトに興味はなく、パリ留学時にその活動を知ったル・コルビュジェのほうが好きだった」と述べられていた。井上が戦後すぐレーモンドを評価し、高崎の文化施設をまかせたのも、ル・コルビュジェとレーモンドの建築はひとつの流れに属するからだ。

さて、久しぶりの井上邸である。

これだけ空間のボリュームがあるのに、軽やかに感じるのは、構造が鉄筋コンクリートや鉄骨ではなく木造のおかげだが、しかし同じ木造でも角材を使った木造ならもっと重くなつたにちがいない。杉丸太の効果に加え、半割の杉丸太の投入がその効果を極限まで高めている。半割は丸太より細いし、丸太を半割で挟むことで、細いがしか



3
3 / すつと連続する軒と窓のモダンさ。

4 / 竹林と片流れの屋根もよく似合う。

4



現代住宅 併走

Antonin Raymond
×
Fujimori Terunobu



5 / 兩戸に学び柱の位置の外側にガラス戸を入れると、横長連続窓が可能になる。

6 / 丸太を半割材で挟むのは伝統的な足場の造りに由来する。

6

7 / 旧井上邸は高崎駅前であり、今はビルが囲む。

5

7



し強靱な視覚的印象が生まれる。かねて、レーモンドに想いを寄せる建築家のあいだで、半割杉丸太による「挟み梁」がレーモンドの創出なのかどうか話題になってきた。近年、東洋大学の内田祥士教授の研究により、日本の仮設用構造として昔からあり、建築家では武田五一が目していたことが明らかになっている。武田は、モダンな設計活動のかたわら伝統的社寺の設計や法隆寺の改修なども手がけているから、そうしたなかで見つけたのだろう。

由

来は日本の伝統的な建設足場や仮設建物としても、それをヨーロッパの木造教会の架構に想を得て山形に組み立て、大きな空間を生み、モダンに仕立てあげたのはレーモンドならではの独創と評している。

この構造の生む空間的効果をより高めているのは床の造りであることに、このたび、初めて気づいた。もし、普通の日本の木造のように玄関のところで一段上がり、床を張っていたら、こう伸びやかに感じられなかったろう。コンクリートの土間とし、今はじゅうたんを張っている。

木造の小屋組はどうして土間とよく合うのだろうか。このことに初めて気づいたのは、伊豆の巨匠「江川太郎左衛門邸」（1600年頃）を訪れ、土間に



8 / 中央の凹部がパティオ。
9 / 原型となったレーモンド邸は、パティオは朝食などに使われていた。



9

一步入り、森を下から見上げたときの様に材が茂る小屋組に接したときだが、今こうあらためて考えると、上方の木と下の土が、自然界の森の中でのように共鳴しているからではないか。もし、普通の民家のように小屋組が太くかつ黒ずんでいけば、上の木と下の土の共鳴は、重く暗い方向へと向かうが、杉丸太、それも磨いた杉丸太の小屋組は「重く暗い」の反対の「軽く明るい」へと反転し、モダンな空間が生まれた。なお、レーモンド自邸の普通の杉丸太に「磨き」の加工を加えたのは井上で、いい判断と思う。

も うひとつ、効果をあげているのは障子。レーモンドは、障子のような伝統の木造建築のなかのモダンな要素を日本人に教えたのは自分だ、としばしば述べていたらしいが、この点について吉村順三は「障子など、いくつも私がレーモンドにそのよさを教えた」と私に語っている。レーモンドが障子に認めたのは、淡い光を放つ四角くて薄い面」という障子だけがもつモダンな特質であって、決して日本の伝統だから取り込みたかったわけではないことを忘れないようにしよう。

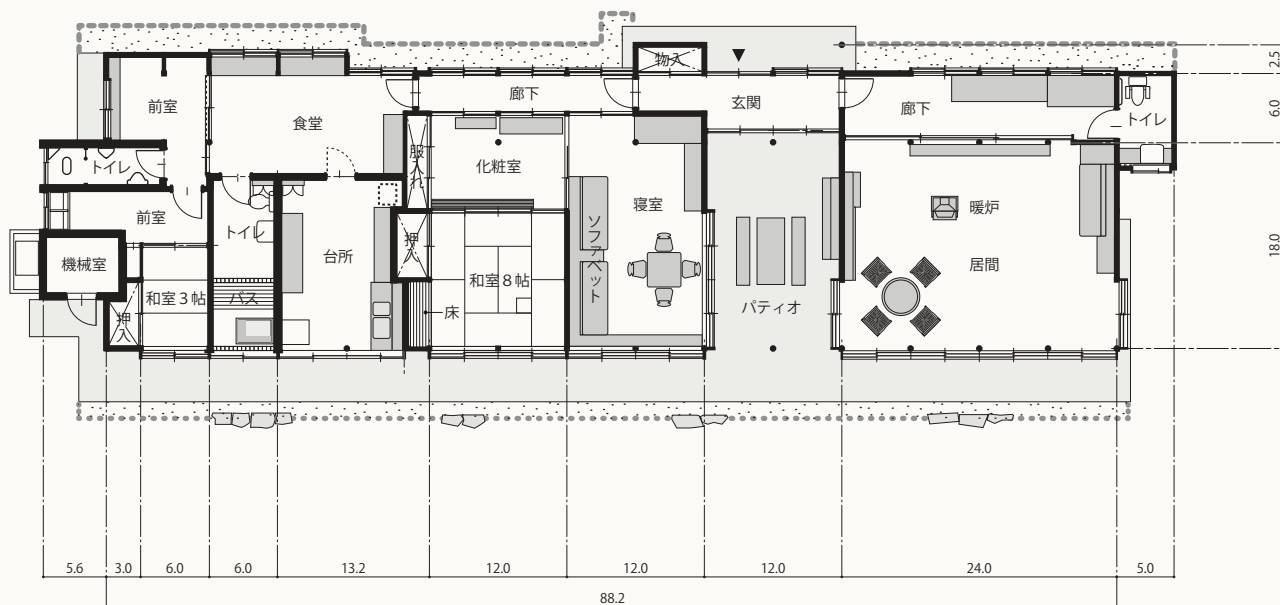
写真をザッと眺めていると気づかないが、部屋を中心の暖炉も見落とさないでほしい。

近年、私は、住宅の起源は火

平面図

0 3 6尺

※表示寸法は尺
※大壁内の柱位置は目視等推定による



1/200



10

10 / 土間と障子の組み合わせは、レイモンドならでは。

11 / レイモンド事務所兼自邸には、ない和室が付いている。

11



現代住宅 併走

Antonin Raymond
×
Fujimori Terunobu

にあり、火のまわりに人が集って内部空間が生まれ、その火と人からなる内部を守るために住宅が必要になった、と考えている。モダニズム住宅への火の投入は、ライトに始まり、レイモンドが続き、吉村順三に引き継がれている。

日本には木造モダニズムというすぐれた一群があり、藤井厚二をスタート点として、レイモンド、前川國男、丹下健三、吉村順三、増沢洵、彼らの木造建築が戦前から戦後にかけて連続と続き、そのなかの最重要作はレイモンドの昭和8（1933）年の「軽井沢の家」とみなしてきた。この判断はまちがっていないが、このたびこの作品を探访して、18年後の戦後の挟み梁の「レイモンド事務所兼自邸」（51）も、最〳は付かないにしても重要作品と確信した。建築のわかる人なら誰でもほしくなるような住宅なんてめったにありはしない。

Former Inoue Residence

旧井上房一郎邸

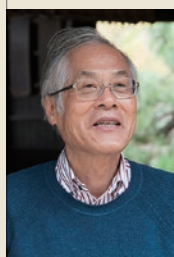


外観。
玄関の側から見る。

建築概要	
所在地	群馬県高崎市八島町 110-27高崎市美術館内
主要用途	住宅
原設計	アントニン・レーモンド
実設計	井上房一郎
施工	井上工業
敷地面積	1,669.60㎡
建築面積	191.21㎡
階数	平屋
構造	木造
竣工年	磨き丸太鉄状トラス架構 1952年
図面提供	高崎市美術館

藤森照信

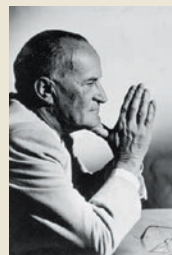
建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞=『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、



Fujimori Terunobu

建築作品「赤瀬川原平邸（ニラハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞。

アントニン・レーモンド



Antonin Raymond

1888年オーストリア領ボヘミア地方（現チェコ共和国）に生まれ、プラグ工科大学（現チェコ工科大学）に学び、アメリカに渡る。フランク・ロイド・ライトとともに帝国ホテル建築のため来日し、1923年独立。そのもとから前川國男、吉村順三などが育ち、日本の20世紀後半の建築界をリードする一大人脈を形成した。世界的にみると、オーギュスト・ペレに続いて打放しコンクリート表現をリードし、コルビュジェもこと打放しについてはレイモンドをパクったと私にはらんでいる。76年逝去。ポトレイト：（株）レイモンド設計事務所提供

Hisao & Hiroko Taki Plaza

寄附によって 生まれた 新しい大学施設

2020年12月、東京工業大学大岡山キャンパス内に、学生のための国際交流拠点「Hisao & Hiroko Taki Plaza（ヒサオ・アンド・ヒロコ・タキ・プラザ）」が竣工した（本格使用は21年4月から）。東工大の卒業生である、ぐるなび取締役会長・創業者の滝久雄さんが寄附した30億円をもとに建設したため、施設名に滝夫妻の名前を冠している。同氏はこれ以外に、お茶の水女子大学と東京藝術大学にも各10億円を寄附。お茶の水女子大は「昨年「国際交流留学生プラザ」が完成済みで、東京藝大も目下、同様の構想が進行中だ。建築設計は滝さんの指名で、3校とも隈研吾さんが手がけている。今回完成した東工大の建築全体とトイレの設計の見どころについて、隈研吾建築都市設計事務所の名城俊樹さんと渡邊啓

太さんにお話をうかがった。

名城さんによれば、3校は敷地条件などが大きく異なることから、とくに設計上の共通点があるわけではないが、国際交流が施設共通のテーマであるため、できるだけ学生が集まりやすいデザインにすること、建物内にアート作品を積極的に展示することを心がけたという。アートに関しては、寄附者の滝さんがパブリックアートの普及・振興活動に力を入れているため、東工大の施設には1階の入口正面に、漫画家の大友克洋さんの原画・監修による壁画・陶板作品が設置されている。

ちなみに、隈研吾建築都市設計事務所です3つのプロジェクトにかかわっているのは名城さんだけで、それ以外のメンバーは大学ごとに異なり、東工大と東京藝大に関してはそれぞれの卒業生がチームを組んでいるという。各大学の事情にくわしく、仕事に携わるうえで愛校心も原動力になると考えると、一石二鳥だろう。また、それだけいる



北側外観。
大岡山の丘を
イメージした建築。

Hisao & Hiroko Taki Plaza

地中に埋まる 大学の新しい 交流施設

いるな大学の出身者が揃った事務所だからなせるわざともいえる。

地下に埋め 見通しを よくする計画

東工大大岡山キャンパスのシンボルといえば、建築家の谷口吉郎が設計にかかわったといわれる本館の時計塔だが、敷地は正門を入ってすぐの位置にあり、その奥に時計塔があるため、「まず正門に立ったときに時計塔が見えることが重要でした。それを実現すると同時に、できるだけ圧迫感を出さない建物にしたいと考えた結果、機能の過半を地下に埋めることになりました」と名城さん。また、大岡山の地名のいわれには諸説あるが、昔から小高い丘が多い土地であることもあって、建築全体を丘状にしたプランが生まれたと語る。東工大出身の渡邊さんいわく、「以前ここにはもともと大きく

マッシブな図書館が立っていたので、見通しはよくなりました」。

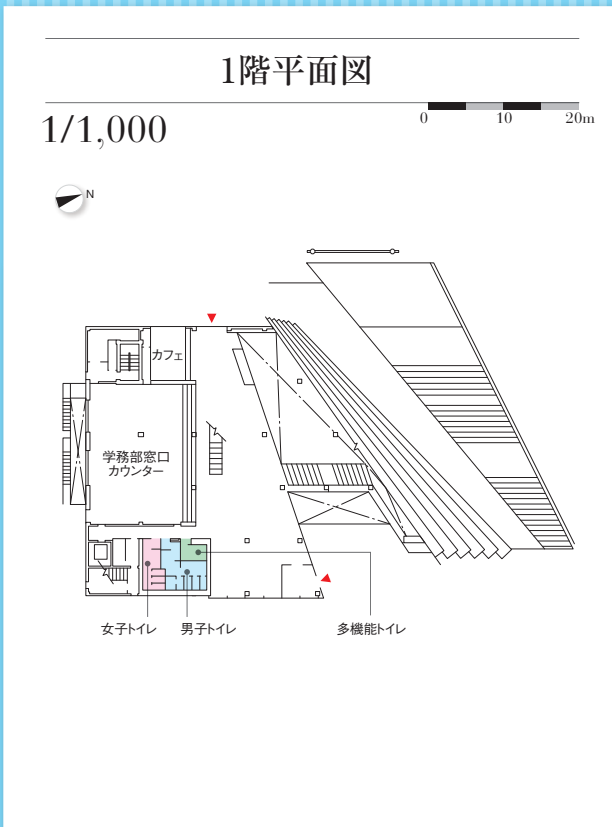
実際に大岡山駅前にあるキャンパスを訪れると、すでに正門前の交差点から、階高を抑えた建築越しに時計塔がはっきり見える。地面から屋根まで階段状のスロープでつながっており、手前ほど低くなっているのも時計塔が見えやすい要因だろう。植栽も施されているので、まさに人工の丘のようだ。手前には地階と隣接する新図書館のドライエリアに通じる大階段があり、地下に大きなボリュームが埋まっていることを感じさせる。室内は地上・地下2層ずつの4層からなり、地下2階にイベントスペース、地下1階に留学・就職情報エリア、1階に学務機能とエントランス、カフェ、2階に畳の小上がりのあるグループワークスペースなどがある。内部も外観のイメージそのままに、4層が大きな階段と吹抜けでシームレスにつながり、さらにはどの階にも外から直接ア

外観

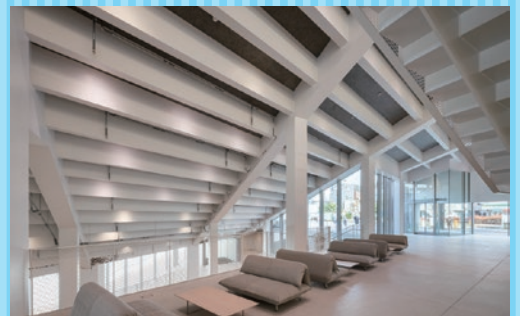


地下の図書館につながる大階段。左手に1階エントランス。

1階内観



↑ 1階全景。壁に掛けられているアートは「ELEMENTS OF FUTURE」(大友克洋)。



→ 1階。地階と吹抜けでつながっている。

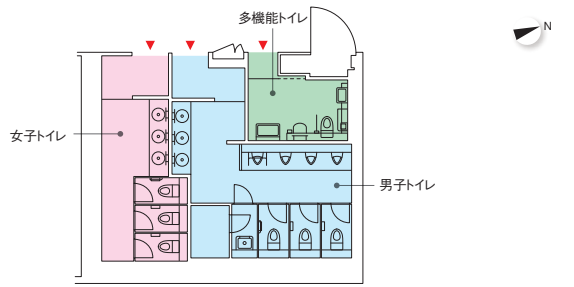
女子トイレ



女子トイレ全景。セキュリティ上、個室の壁を天井まで立ち上げている。

1階トイレ平面図

1/250



男子トイレ

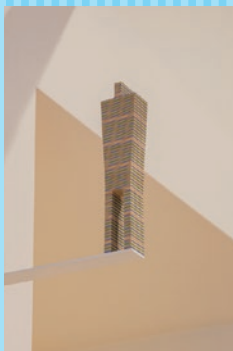


男子トイレ全景。ライニングは書類を置ける高さに抑えている。

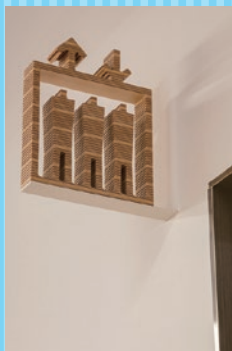
各サイン



女子トイレサイン。



男子トイレサイン。



エレベータサイン。

ブローチできるため、視線が縦横無尽に抜け、階層を超えた連続性と開放感が感じられる。

東工大らしい トイレを目指して

トイレは4フロアとも同じ位置に1カ所ずつ設けられている。完成済みのお茶の水女子大のトイレと比較すると、白を基調にしたシンプルで清潔感のある空間、カウンター下をオープンにして照明付きの個別鏡を配した洗面コーナーなど、一見すると似ているように見えるが、「基本的な造りは近いですが、予算や水圧などの諸条件も異なりま

大が教職員を含めても圧倒的に女性が多いのはわかるが、東工大も大学のなかではかなり特殊で、昨年の公式発表によると、学士課程学生全体に占める女性の割合は年々増えているとはいえず、わずか12・9%。それゆえ、昨今のトイレには珍しく、女子トイレにはパウダーコーナーもなく、全体に占める男子トイレの面積が他校に比べてかなり広いそうだ。「今回の建物は職員が多く、職員は学生に比べると女性の比率が高いので、まだこれでも他の校舎に比べると女子トイレは大きめになっています」と渡邊さん。

外観俯瞰。左手奥に時計塔のある本館が見える。

Hisao & Hiroko Taki Plaza

ヒサオ・アンド・ヒロコ・タキ・プラザ

建築概要

所在地	東京都目黒区大岡山2-12-1
事業主	国立大学法人東京工業大学
主要用途	複合施設
設計	隈研吾建築都市設計事務所
施工	鹿島建設、日比谷総合設備、大栄電気
敷地面積	137,088.40㎡
建築面積	1,293.37㎡
延床面積	4,879.39㎡
階数	地上2階、地下2階
高さ	13.96m
構造	鉄筋コンクリート造
設計期間	2017年8月～2019年1月
施工期間	2019年3月～2020年11月

おもなTOTO使用機器

IF
●女子トイレ
WL一体形便器ネオレストAH2 CES9898WRT15
●男子トイレ
WL一体形便器ネオレストAH2 CES9898WRT15
壁掛壁排水自動洗浄小便器 UFS900WR
パブリック用手すりレストルームアイテム01 T115CU3R
●多機能トイレ
多機能トイレパック XPDA5RS4211WWG
マーブライツカウンターボウル一体タイプ MC60
ベビーシート YKA25R

隈研吾
建築都市設計事務所
パートナー

名城俊樹

Meijo Toshiki



隈研吾
建築都市設計事務所
設計室長

渡邊啓太

Watanabe Keita



らだの性とは異なる性自認をもつ人)の学生の受け入れを決定したこともあり、多様な利用者に配慮したものだという。大学では先進的な試みといえるだろう。

ところで、東工大のトイレでひときわ目を引くのが、入口のピクトサインだ。ごらんとおり、積層合板を用いた立体的なおブジェが設置されており、エレベータのサインも同様のデザイン。素材は木材とカラー再生紙を積層した製品「ペーパーウッド」で、男性用がブルー、女性用がレッドの紙を挟んだ板を使用している。隈研吾建築都市設計事務所にはサイン専門のスタッフがあり、たいていオリジナルでデザインしているそうだ。お茶の水女子大のピクトサインは男性・女性・多機能のどれも、スクールカラーの古代紫を用い、形状だけを変えたピクトグラム

を採用しており、名城さんいわく、「昨今のジェンダーの観点からすると、あちらのほうが時代に合っているんじゃないか、ここでは形だけではややわかりにくいいため、少し色をつけました。縞模様の素材は、建物の雰囲気にも合っているので選んだものです」。

はたして、3つ目の東京藝大の建築とそのトイレがどのようなものになるのかも楽しみだが、東工大の「Hisao & Hiroko Taki Plaza」に関しては、内も外もどこまでもつながった造りが印象に残った。隈さん自身が内覧会当日に配布されたパンフレットに綴っているとおり、「今後、ますます進んでいく国際化のなかで、この緑の丘からさまざまな交流と交換が生まれていくことを期待したい」。

Architecture of The Earth

Ensamble Studio: Architecture of The Earth

本展覧会は2021年6月8日(火)からの公開を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う世界的なコンテナ不足とスエズ運河座礁による海上輸送の混乱により、会期を変更いたします。

スペインとアメリカを拠点に活動が続ける建築家
アントン・ガルシア=アブリルとデボラ・メサが主宰するアンサンブル・スタジオ。
地球規模の視点と自然と響きあうような力強い造形、
独自の構法を軸に、建築の可能性を追求する彼らの、日本で初めての個展を開催。
会場では「地球」と「建築」の関係性の探究のなかから生まれたプロジェクトに焦点をあて、
アンサンブル・スタジオ独自のリサーチ・設計・建設の過程を、
模型や映像を通じて紹介します。



© Juan Bana

ランドスケープの構造体 ドーモ (丸屋根)

(米国、モンタナ州、ティベット・ライズ・アート・センター、2016)

Architecture of The Earth

文／アントン・ガルシア＝アブリル＆デボラ・メサ
アンサンブル・スタジオ
翻訳／坂本和子

建築は地球から生まれる。大地を構成する金属、鉱物、繊維、油、土が採掘され、結合され、変化する。大地から建築へ。何千年もの間、このプロセスは単純明快だった。木の幹が骨組みになり、泥がレンガになり、石が壁やアーチやドームになった。しかしそのような技術を用いて構築された建築は、いまやわずかな痕跡しか残されていない。時が経つにつれ、そのほとんどは崩壊し、水に侵食され、太陽に焼かれ、風に吹き飛ばされ、大地に揺さぶられた。過去100年の間に、建築を生み出すプロセスは最終的に「木を切り、小屋を建てる」というような直接的なものと複雑にはなく、エネルギーを大量に消費し、ものごとが複雑にからまりあう構造になってしまった。そして多くの場合、原材料がわからなくなるほど変化してしまう。岩は薄いタイルになり、黒い石油は光沢のあるプラスチックになり、砂は透明なガラスになる。物質は産地から世界中に輸送され、多くの場合は枯渇するまで搾り取られつづけ、放棄され、別のものに置き換えられてしまう。私たち建築家は、設計上の判断が環境に深刻な影響を与える一方で、建築を形にするときに、「どのように地球そのものを再構築するか」という自分たちの力量を超えた大きな課題に注意を払うことは、ほとんどない。

「Architecture of The Earth」は、アンサンブル・スタジオがこの20年間に手がけた一連の研究や専門的なプロジェクトを紹介する。それらはすべて、異なる時期、場所、異なる動機にもとづいて行われたが、建築と地球の関係、そして人間が環境に与えてきた影響について考えるのに役立つ。地形を読み解き、再び活用し、地面を補強し、あるいは型として使うスペイン、コスタ・ダ・モルテの「トリュフ」、アメリカ、モンタナ州の「ランドスケープの構造

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY・MA

次回 予告

妹島和世、西沢立衛／ SANAA展 環境と建築

世界を代表する建築家、妹島和世、西沢立衛／SANAA。2020年に予定された展覧会を、会期を変更して開催いたします。環境と建築の融合を目指す彼らの国内外での最新プロジェクトの状況を紹介いたします。

詳細は
TOTOギャラリー・間ウェブサイト
お知らせいたします。



TOTOギャラリー・間

所在地

東京都港区南青山1-24-3

TOTO乃木坂ビル3F

電話／03(3402)1010

ファクス／03(3423)4085

開館時間／11:00～18:00

休館日／月曜日・祝日、

夏期休暇、年末年始、展示替え期間

入場料／無料

アクセス

●東京メトロ千代田線

「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分

●都営地下鉄大江戸線

「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分

●東京メトロ日比谷線

「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分

●東京メトロ銀座線・

半蔵門線、都営地下鉄大江戸線

「青山一丁目」駅下車

4番出口徒歩7分



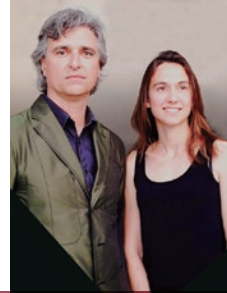
<https://jp.toto.com/gallerma>

会期／2021年6月24日(木)～9月12日(日)

休館日：月曜・7月22日(木)、23日(金)・夏期休暇[8月9日(月)～16日(月)] 事前予約制(*)

アンサンブル・スタジオ

Ensemble Studio



© Ensemble Studio

アンサンブル・スタジオは、2000年に設立され、建築家アントン・ガルシア＝アプリル(1969年生まれ、写真左)とデボラ・メサ(1981年生まれ、写真右)が主宰する職能横断型チームである。彼らの作品はリサーチと実践のバランスをとりながら、ランドスケープの構築から住宅のプレファブ리케이션といった多様な課題に取り組むために、タイポロジー、技術、方法論を刷新する。初期の作品から最新作まですべてのプロジェクトにおいて、彼らが扱う分野、そして社会における建築家の役割のさらなる進歩を目指して、実地実験を行っている。彼らの作品では、アート、科学、建設、開発とデザインとを連携させ、アイデアを最もよい方法で形に置き換える方法を探究している。

近年ガルシア＝アプリルはマサチューセッツ工科大学にて、メサはジョージア工科大学にて教鞭をとる。代表作に、「ランドスケープの構造体」(米国、モンタナ州、ティベット・ライズ・アート・センター、2016)、「カン・テラ(大地の家)」(スペイン、メノルカ島、2020)、おもな受賞としてRIBA チャールズ・ジェンクス賞(2019)などがある。



© Iwan Baan

トリュフ

(スペイン、コスタ・ダ・モルテ、2010)



© Iwan Baan

スペイン著作権協会本部

(スペイン、サンティアゴ・デ・コンポステラ、2007)



© Ensemble Studio

ペトリファイド・リバー(石化した川)
リサーチ

(スペイン、コスタ・ダ・モルテ、2010)



© Iwan Baan

ランドスケープの構造体
インバーテッド・ポータル(裏返された門)

(米国、モンタナ州、ティベット・ライズ・アート・センター、2016)

●News File(55ページ)にて展覧会とあわせて発行の書籍
「大地の建築アンサンブル・スタジオ」を紹介しておりますので、
あわせてご覧ください。

TOTO GALLERY・MA

体」、スペイン、メノルカ島の「カン・テラ」などのプロジェクトは、自然の資源を無制限に搾取することなく、土地やランドスケープの自然の力を活かして構築され、相乗効果を生み出している。地質作用に学びながら原始的な施工方法が編み出され、新しい建築言語が見出される。地形から読み取った大地の論理を設計行為に結びつけながら、建築の新たな可能性を探し求める。先入観なしに、不完全さを受け入れ、人間の生活で求められることに感覚的に応える、新しい美の概念が現れる。

TOTOギャラリー・間で開催される展覧会では、会場の各空間で、アイデアから実現化へ、そしてまたアイデアへ戻るループをたどりながら、現在も続き、終わることのない冒険として、展示のテーマ「Architecture of The Earth」が展開される。建設されたプロジェクト、されなかったプロジェクトが一堂に会し、さまざまな検討段階での考え方を示しながら、それぞれの敷地の枠を超えた幅広い議論の一部として、関係・影響・進化を明確に示している。模型や映像が組み合わされ、時間・空間・物質が一体となった全体的な経験を提供する。この展示に合わせて、同じタイトルの書籍が出版される。展覧会とともに、そして展覧会が終わった後も、より詳細なかたちで、展示を補完する考察やコンテンツを見ていただきたいと思います。

TOTOからのお知らせページです。
 イベント、新商品、最新情報など知っていただくと
 お役に立つ情報を心がけています。
 あわせてご注目ください。

News 3

reddotデザイン賞2021にて、
 6商品受賞(内1点はBest of the Best受賞)
 iFデザイン賞2021にて、6商品受賞

下記商品12点が、国際的なデザイン賞「レッドドット・デザイン賞2021(*1)」と「iFデザイン賞2021(*2)」を受賞しました。このうち「アクアオート コンテンポラリータイプ(オーバル)*海外向け」はレッドドット最優秀賞である『ベスト・オブ・ザ・ベスト』に選出されました。TOTOは引き続きデザインとテクノロジーの融合を追求し、お客さまへよりよい暮らしを提供してゆきます。

*1 reddotデザイン賞
 1955年から続く国際的権威あるデザイン賞。主催はドイツ・エッセン「ノルトライン・ヴェストファーレンデザインセンター」。デザイン専門家が美しさ、革新性、機能性、品質などの基準に沿って厳正に審査し認められた商品。

*2 iFデザイン賞
 1953年から続く国際的権威あるデザイン賞。主催はドイツ・ハノーバー「iFインターナショナルフォーラムデザイン」。デザイン専門家が美しさ、機能性、革新性を厳正に審査し認められた商品。

ニュースリリース(reddotデザイン賞)→
https://jp.toto.com/company/press/2021/03/24_011181.htm
 ニュースリリース(iFデザイン賞)→
https://jp.toto.com/company/press/2021/04/20_011214.htm



Best of the Best
 受賞 アクアオート
 コンテンポラリータイプ
 (オーバル)
 *海外向け



WASHLET G5
 ウォッシュレット一体形便器
 *海外向け



アクアオート
 GMシリーズ
 *海外向け

アクアオート
 *海外向け

アクアオート
 コンテンポラリー
 タイプ(角)

アクアオート
 コンテンポラリー
 タイプ



アクアオート
 Bタイプ

アクアオート
 *海外向け

*海外向け

自動洗浄小便器

*低リップ

自動洗浄小便器



ガララート浴槽&洗面器
 (ラウンド)
 *海外向け

ガララート浴槽&洗面器
 (スクエア)
 *海外向け

News 1

システムキッチン
 発売40周年

TOTOのシステムキッチンは、おかげさまで発売40周年を迎えました。1981年「デラックスシリーズ」を発売して以降、ライフスタイルの多様化やお客さまニーズの変化にあわせ、世のなかにはない新しい商品やアイテムを提供してきました。そして昨年9月に「美しい、使いやすい、きれい」をコンセプトにザ・クラッソをフルモデルチェンジして発売。なかでも、オンリーワンアイテムのクリスタルカウンターはお客



さまから、「空間が明るくなって、気持ちよくなった」「透明感と清潔感が気に入っている」といった喜びの声をいただいています。これからも、お客さまの声を真摯に受け止めながら、ご満足いただける新たな価値を提案していきます。

News 2

TOTOベトナム
 ハノイショールーム
 オープン

3月12日、TOTOベトナムはホーチミンに続き首都ハノイに、国内ふたつ目の直営ショールームを開設しました。本ショールームは、一般のお客さま向けの商品展示に加え、プロのお客さまにもご満足いただけるテクニカルセンター(技術展示やパブリック施設向け商品の展示)機能を有した総合型ショールームです。また、待合スペースでは、文化推進活動の一環である TOTO出版が発行する書籍が閲覧

でき、建築やデザインを学ぶ方に情報を提供。ショールームを通して、ベトナムのみなさまによりいっそう、TOTO独自の技術やニーズに合わせた商品、情報を発信していきます。



B Books

TOTO出版のお知らせ

Book 1

『大地の建築 アンサンブル・ スタジオ』

present!

同封の
「TOTO通信アンケート」に
お答えいただいた方の中から、
抽選で10名の方に
プレゼントいたします。



スペインとアメリカを拠点に活躍する建築家ユニット。地球規模の視点と自然と響きあうような力強い造形、独自の構法を軸に、建築の可能性を追求する建築家の日本初の作品集。「Architecture of the Earth (大地の建築)」をテーマに、リサーチ・設計・建

設プロセスを写真、図版、テキストでわかりやすく紹介した1冊。

著者	アンサンブル・スタジオ: アントン・ガルシア=アブリアル、 デボラ・メサ
定価	3,300円(税込)
体裁	250×190mm、ソフトカバー、 202ページ
発行	2021年6月

Book2

江戸東京博物館 特別展 「縄文2021」関連書籍 『東京に生きた縄文人(仮)』

東京の縄文時代に生きた人々の暮らしを伝える展覧会が特別企画展として、江戸東京博物館で開催される。東京の縄文時代を出土品や調査結果より考える展示はじつに30年ぶりとなる。本書では、展覧会内容に加

え、縄文時代の暮らしについてより理解の深まるテキストや資料、さらに館長の藤森照信氏と考古学者の山田昌久氏の対談が掲載され、考古学の新しい楽しみ方ができる1冊となっている。

監修	公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館
予価	2,640円(税込)
体裁	未定
発行	2021年10月

I Information

TOTO乃木坂ビル

東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル

2F

Bookshop TOTO

電話/03(3402)1525
定休日/月曜日・祝日・
「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・
日曜日・夏期休暇・年末年始
※事前予約制。詳細はBookshop TOTOウェブサイト
(<https://jp.toto.com/bookshoptoto>)をご参照ください。

2F

TOTO出版

電話/03(3402)7138
全国の書店でお求めください。
直営店Bookshop TOTOでもお求めになります。
書店遠隔の方はお問い合わせください。

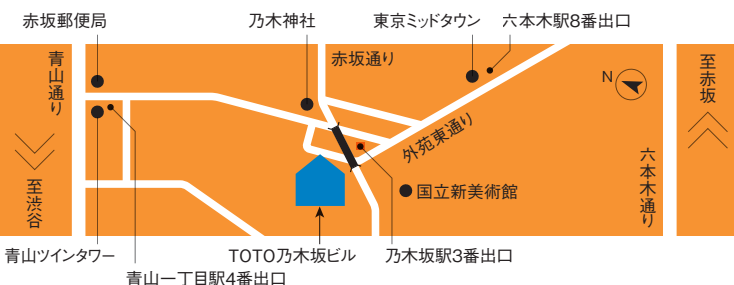
B1・1F

セラトレーディング

電話/03(3402)7134(東京ショールーム)
定休日/月曜日・祝日・
夏期休暇・年末年始
※事前予約制。
変更の可能性があるため、詳細はウェブサイト
(<https://www.cera.co.jp/showroom>)をご参照ください。

アクセス

- 東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分
- 都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分
- 東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分
- 東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分



C Cera

セラトレーディングのお知らせ

東京ショールームにて オンラインコンサルティングを 実施しています

セラトレーディング 東京ショールームでは、オンラインによるコンサルティングを実施しております。ご自宅やオフィスで、東京ショールームの展示品をご覧いただきながら、お客さまに最適な商品をご提案いたします。お近くにショールームがない方や、お仕事、家事、育児などでご来館いただく時間がない方におすすめです。この機会にぜひご利用ください。



詳細はこちら
→ <https://www.cera.co.jp/showroom/#online>





タンク式とフラッシュバルブ式の
いいとこどり!

タンク式と同じ給水口径15Aでフラッシュバルブ式と同等の連続洗浄※が電源レスで実現!

※一度洗浄してから約20秒で次の洗浄が可能です。



コンパクト&すっきりデザイン

ローシルエットのフラッシュタンクと、パブリックトイレにおすすめのウォシュレットとのセットは、一体感のある美しい納まりで、空間がすっきり仕上がります。



コンパクトなタンクのローシルエットデザインで空間がスッキリ。

サイドカバーで便器側面の凹凸を覆い、お掃除もすっきり。(床排水タイプ)

NEW

パブリックコンパクト便器 フラッシュタンク式

リモデル対応商品・掃除口付タイプもご用意

ラクラク施工



タンクをセットするだけで設置完了。

フレキシブルなので接続がカンタン。

※現場の状況によって異なる場合があります。

コンパクト設計



ピュアレストQR(CS232系)との比較

※1 便ら先端寸法は、右記となります。(設置状況によって異なる場合があります) アプリコットPの場合:686mm ウォシュレットPSの場合:685mm (床排水の場合)
※2 壁排水タイプの場合の便器前寸法は723mm。マイナス37mmコンパクト。

ボタンを押すたびに発電する「エコリモコン」タイプ



「ウォシュレット® アプリコットP」



便器洗浄ボタンが独立 公共トイレ操作系JIS (JIS S 0026)対応。

お問い合わせは TOTO技術相談室 ☎0570-01-1010

受付時間:〈平日〉9:00~18:00 〈土曜日〉9:00~17:00 (日・祝・夏期休暇・年末年始を除く)

建築専門家のための情報サイト COM-ET(コメント)

COM-ET 検索 で検索 <https://www.com-et.com>

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客様No.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999

*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客様からお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(<https://jp.toto.com>)をご覧ください。